

平成元年度県道西同笠浅羽線新堀梅山地区
歩道設置工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

青 木 遺 跡

静岡県磐田郡浅羽町教育委員会

序 文

平成元年度、『県道「西同笠、浅羽線」新堀・梅山地内歩道設置工事』に伴う埋蔵文化財発掘調査の結果は、過去において発掘された類例が少ない為、極めて貴重な存在と考えられる古墳時代前期（４世紀）の平地住居跡が発見された他、井戸の跡と見られる遺構の底部には壺型の土器を集水升状にすえたもの等も見られ、特色のあるものとして今後の研究調査が期待される旨の報告を受け、今迄、当地区は平坦地で歴史的な遺物の存在は極めて少ない……と一般的に言われてきただけに、町史編纂発足の初年度にあたり此の様な資料の出現したことを喜ぶと共に驚きも一入で、続けて行われて居る新堀遺跡の発掘調査へ大きな期待を寄せているところです。

埋蔵文化財の問題は、人口急増に伴う土地利用状況の変化により、宅地造成や工場用地等への変換要求が強まり発掘調査要件が急増した為、浅羽町の従来方式である日本考古学協会、柴田稔氏に委嘱するだけでは到底、処置不能の状態となり、県教委文化課の御助言のもとに文化財担当員として、社会教育課に山本義孝君の着任を得て、各種の要望に応えるべく鋭意努力して来たところであります。

本、青木遺跡と同時展開で調査をすすめている隣接の新堀遺跡については、その緊急性と大規模性等を考慮し、県文化財調査研究所に御力添えをお願いし実施出来ることとなったもので、一連の遺跡群として、本調査結果も今後進展するであろう新堀遺跡や梅山遺跡群等の調査結果と相まって、相対的に比較考察が加えられることにより、始めて浅羽平野の黎明期の姿が解明されるものと期待されています。

柴田、山本両調査員をはじめ、発掘担当各位や関係者の皆様の御努力と御協力に対し心から御礼を申し上げ序文といたします。

平成３年２月

浅羽町教育委員会教育長 岡 本 幸 夫

例 言

1. 本書は平成元年度県道西同笠浅羽線新堀梅山地区歩道設置工事に伴う埋蔵文化財調査報告書である。
2. 本調査は静岡県袋井土木事務所長を委託者、浅羽町を受託者として、浅羽町教育委員会が調査を実施した。
3. 発掘調査は1989年11月21日から1990年3月15日まで行い、整理・報告書作成作業は1990年度に行った。
4. 調査にあたって静岡県教育委員会文化課の指導を得た。
5. 本調査の調査体制は下記のとおりである。

調査主体者 静岡県磐田郡浅羽町教育委員会教育長 岡本 幸夫
調査担当者 柴田 稔
調 査 員 山本 義孝
事 務 局 浅羽町教育委員会社会教育課
作 業 員 荒井克己 荒井友彦 石川幸一郎 石川信夫 大石広司 岡本たつ枝
加藤節夫 金原藤江茂 久保田久子 小杉真一 佐藤勝人 清水道男
鈴木ため子 武田久馬 玉木加奈子 千葉啓子 恒川つる子 西尾義男
袴田なみゑ 原 幸一 柳沢喜洋 山本さつき
6. 資料の整理・本書の執筆は柴田稔の指導の下で山本義孝が行ったが、遺物の水洗い・注記・復元は岡本春子・松本京子によるところが大きい。

目 次

I	は じ め に	7
	1. 遺跡の位置と環境	7
	2. 周辺における調査例と成果	7
II	調査の方法と地区の設定	9
III	遺 構 と 遺 物	12
	1. 北区遺構の概要	12
	2. 北区層位	12
	3. 北区遺構各説	13
	4. 中央区遺構の概要	16
	5. 中央区遺構各説	16
	6. 南区遺構の概要	30
	7. 南区層位	32
	8. 南区遺構各説	32
IV	ま と め	40

挿 図 目 次

第1図	周辺の遺跡と遺跡位置図	8
第2図	調査地区配置図	10
第3図	北区遺構配置図	11. 12
第4図	北区土層断面図	13
第5図	掘立柱建物2・3実測図	14
第6図	中央区遺構配置図	15. 16
第7図	土坑3実測図	17
第8図	土坑3出土遺物実測図	17
第9図	土坑2・4実測図	18
第10図	土坑2出土遺物実測図	19
第11図	井戸状遺構3実測図	20
第12図	井戸状遺構3出土遺物実測図	21
第13図	井戸状遺構1・2実測図	22
第14図	井戸状遺構1・2出土遺物実測図	23
第15図	土器の溜まり実測図	25
第16図	土器の溜まり出土遺物実測図	26
第17図	井戸状遺構4実測図	27
第18図	井戸状遺構4出土遺物実測図	27
第19図	溝2・4土層断面図	28
第20図	南区遺構配置図	29. 30
第21図	南区土層断面図	31
第22図	下層の遺構配置図	32
第23図	土坑11実測図	33
第24図	平地住居出土遺物実測図	33
第25図	平地住居炭・炭化材出土状況図	34
第26図	中層の遺構配置図	35
第27図	上層の遺構配置図	36
第28図	上層柱穴実測図 (No. 1)	36
第29図	上層柱穴実測図 (No. 2～5)	37
第30図	土坑15実測図	39
第31図	土坑15出土遺物実測図	39

図 版 目 次

- 図版 1 上 掘立柱建物 2 周辺状況（北から）
下 掘立柱建物 3 検出状況（北から）
- 図版 2 上 土坑 3 貝殻出土状況
下 土坑 3 完掘状況
- 図版 3 上 土坑 2 遺物出土状況
下 土坑 2 遺物出土状況（部分）
- 図版 4 上 土坑 2 土層断面
下 土坑 4 検出状況
- 図版 5 上 井戸状遺構 3 底部状況
下 土器の溜まり遺物出土状況
- 図版 6 上 溝 2 完掘状況（北から）
下 溝 2 土層断面（西壁）
- 図版 7 上 平地住居炭・炭化材検出状況（北から）
下 平地住居完掘状況（北から）
- 図版 8 上 平地住居周堤部土層断面（右寄りの台形状部分が周堤）
下 平地住居周堤部状況（上端の線までが周堤の範囲、その先は末掘）
- 図版 9 上 平地住居貯蔵穴内の壺型土器出土状況
下 土坑 12 土層断面
- 図版 10 上 土坑 15 遺物出土状況
下左 柱穴 No. 1 断面
下右 柱穴 No. 4 検出状況
- 図版 11 土坑 2 出土遺物
- 図版 12 土坑 3・井戸状遺構 1・井戸状遺構 4 出土遺物
- 図版 13 井戸状遺構 3・土器の溜まり・平地住居・土坑 15 出土遺物

I は じ め に

1. 遺跡の位置と環境

この報告書で報告する青木遺跡は、通称浅羽平野と呼ばれる海岸平野地帯の中央付近に位置している。人口増加の著しい浅羽町の中にあっても、当地域周辺では昔ながらの田園風景を保ち続け豊かな穀倉地帯を形成してきた。しかし、近年は都市化の波がこの地域にも及び始め、その景観も徐々に変化をとげようとしている。

青木遺跡は県道^{にしどうり}西同笠浅羽線に沿って南北に長く続く微高地上に立地している。このすぐ西側にも豊住^{とよすみ}から新堀^{にいほり}へと続く同様な微高地があり、これらの上には青木遺跡以外に北ハサマ、屋敷通^{やしきどおり}、黒清^{くろせい}の各遺跡が確認されている。

これら南北方向の微高地は、旧原野谷川^{はらのや}によって形成された自然堤防で、袋井市域からここまで連続的にたどることができる。

青木遺跡の立地する自然堤防の東側一帯には海拔が1 m以下となる低地帯があり、かつてのラグーン（潟湖）を形成した名残となっている。このラグーンは江戸時代まで残存していた。

青木遺跡のすぐ南にも馬場第1・第2、西立^{にしだち}の各遺跡が確認されている。この土地は旧原野谷川がラグーンに流入し、その堆積作用の結果生じた三角洲状の地形と考えられている。

これに対し南の梅山、松原を中心とした地域は東西方向に長い微高地を形成する。これは縄文時代中期頃の海水準の低下に伴って陸地化した砂堤列^{はちまんぐう みやにし}と考えられ、八幡宮、宮西などの遺跡が確認されている。この砂堤列からは僅かながら縄文時代の遺物も採集されている。

砂堤列上に営まれた八幡宮、宮西などの遺跡は、自然堤防上に営まれた青木遺跡などの遺跡と総称され梅山遺跡群として扱われている。この周辺地域が本格的な生活の舞台となるのは弥生時代以降のことである。

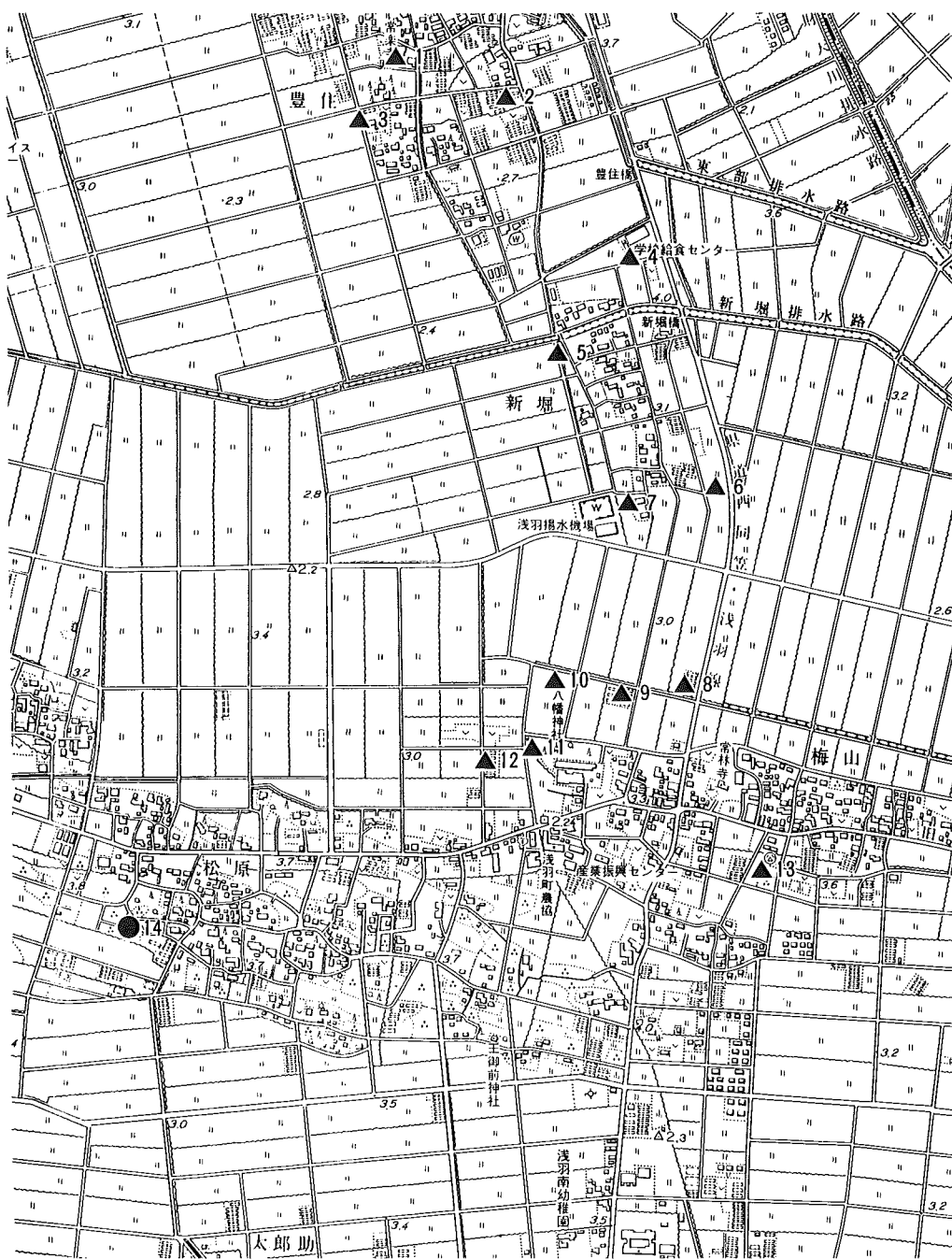
2. 周辺における調査例と成果

青木遺跡を含めた梅山遺跡群内では、今までに数ヶ所の調査例があるため、ここにその概要を記す。

青木遺跡周辺では県営圃場整備事業に伴い、1981年にグリット調査を中心とした調査が行われ、遺跡の範囲、年代が絞り込まれた。この対象となった遺跡は西立、馬場第1、青木の各遺跡である。特に馬場第1遺跡からは7世紀代と考えられる掘立柱遺構が、西立遺跡では井戸から鎌倉時代初め頃の中国製青磁、ふいご、墨書土器などが発見された。（註1）

これを受けて1982・83年の2年に分けて馬場第1・第2、青木遺跡（A21・A25・A29・A30地点）が調査された。この結果、青木遺跡からは古墳時代前期の溝状遺構、土坑、住居址などが検出され、遺物も古墳時代前期を中心として室町時代に至る各時代のものが出土した。

馬場第1・第2遺跡は低地帯によって隔てられた遺跡で、溝状遺構、土坑、井戸状遺構、掘



第1図 周辺の遺跡と遺跡位置図

1. 常楽寺遺跡 2. 平民遺跡 3. 石原遺跡 4. 北ハサマ遺跡 5. 屋敷通遺跡
 6. 青木遺跡 7. 黒清遺跡 8. 西立遺跡 9. 馬場第1遺跡 10. 馬場第2遺跡
 11. 八幡宮遺跡 12. 宮西遺跡 13. 野鳥遺跡 14. 地藏山古墳

立柱建物などが検出された。遺物は古墳～室町時代に至るものが出土するが、奈良～鎌倉時代が中心と考えられる。(註2)

北ハサマ遺跡では学校給食センターの建設に伴って1989年に調査が行われた。平安時代後期頃の溝状遺構が検出され、奈良～平安時代に至る遺物が出土した。(註3)

黒清、屋敷通、北ハサマの各遺跡を含む広大な範囲では、住宅供給公社の宅地造営に伴い1990年から静岡県埋蔵文化財調査研究所の手によって調査が続けられている。(註4)

青木遺跡は自然堤防上に立地し、新堀、豊住へと南北に長く点在する遺跡の一部と、馬場第1・第2、西立遺跡は三角洲上に位置し、東西に長く点在する遺跡の一部とそれぞれ考えられている。いずれも中・小遺跡に属するが、これらは結合して機能する遺跡群的性格が強く、その場合中心的な集落として青木遺跡が評価されている。

静岡県埋蔵文化財調査研究所の調査は面積的にも今までの調査をはるかに圧倒するものであり、この成果を待って青木遺跡を再評価する必要がある。

ともあれ、浅羽町における最初の考古学的な調査が行われたのはこの青木遺跡である。こうした意味からも、浅羽平野の正しい歴史を解明する起点となった学史的意義は大きい。

註

1. 柴田 稔 『青木・馬場第1・西立遺跡』 浅羽町教育委員会 1982
2. 柴田 稔 『青木、馬場第1・第2遺跡』 浅羽町教育委員会 1984
3. 1991年3月に報告書刊行予定
4. 1990年4月から1991年9月にかけて調査の予定。調査面積は約13,000m²。この調査では黒清、屋敷通、北ハサマの各遺跡を一括し、新堀遺跡として扱っている。

Ⅱ 調査の方法と地区の設定

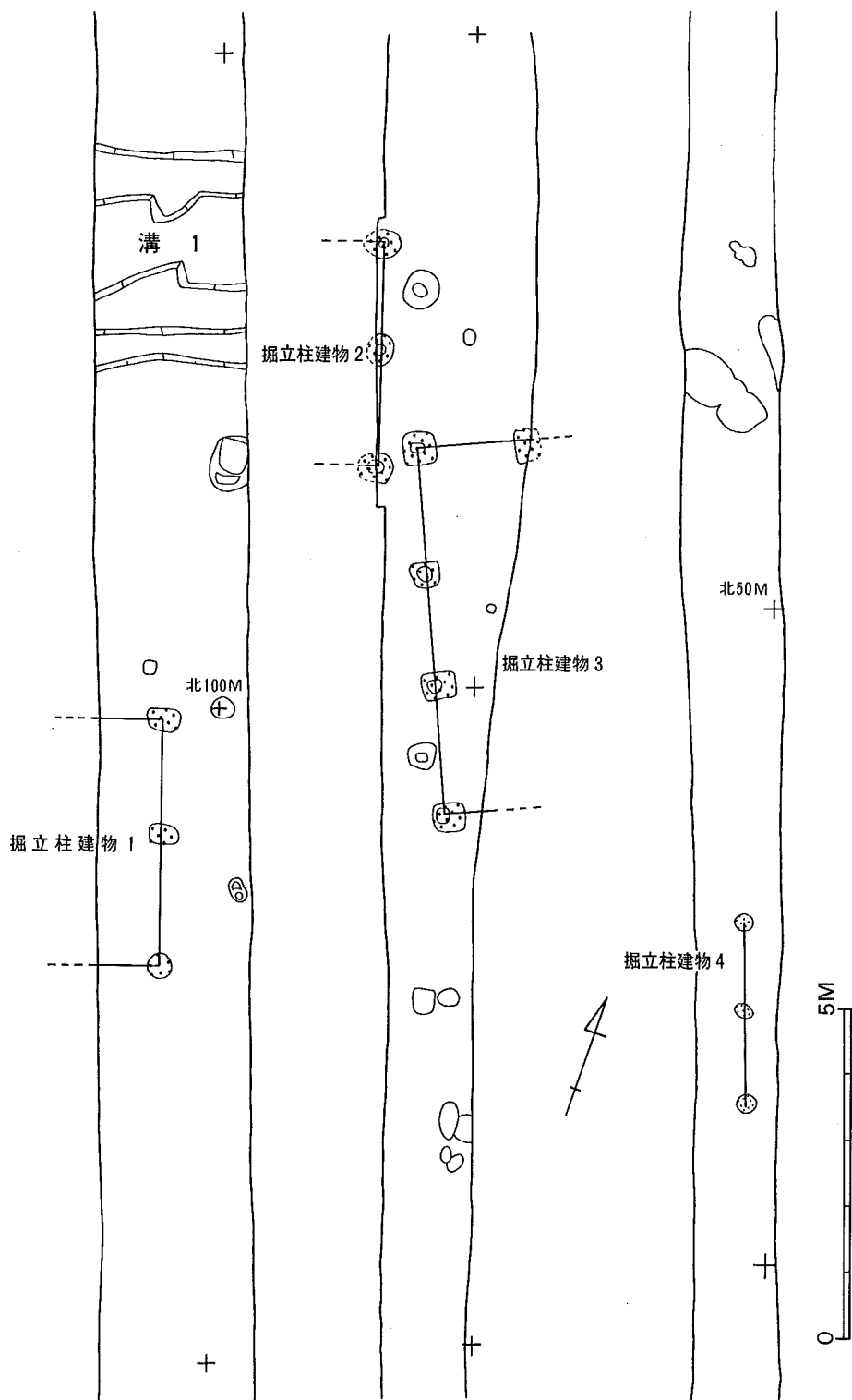
調査は歩道新設工事に伴い実施した。このために狭いところでは1.5m、広いところでも3mに及ばない幅のトレンチを設けることとなった。まづ、バックホーに拠ってトレンチ部分の耕作土を除去し、遺構面まで機械的に平らに掘り下げていった。耕作土を除去するとすぐに遺構が検出できる場所もあるが、遺構が識別しにくい場所も多く、故意に深く掘り下げた箇所も多い。このため遺構検出面の海拔にばらつきがみられる。

調査範囲が320mと長い範囲に及ぶので、調査区を北、中央、南の3区に分けて整理した。県道西同笠浅羽線から新堀集会所に向かう道路でトレンチが区切れるのでここを北区と中央区の境に、測量の基準点から南に100mの位置を中央区と南区の境にしている。

遺構の測量は中央区の北端に任意に基準点を設けた。次にこの点を基としたトレンチ方向に平行する南北の基準線を決め、線上に10m毎の杭を設けた。この基準線は、トレンチがカーブし始める南90mでその方向を西に7度振り、更に南140mでは西に9度振っている。



第2図 調査地区配置図(2,500分の1)



第3図 北区遺構配置図 (その1)

Ⅲ 遺構と出土遺物

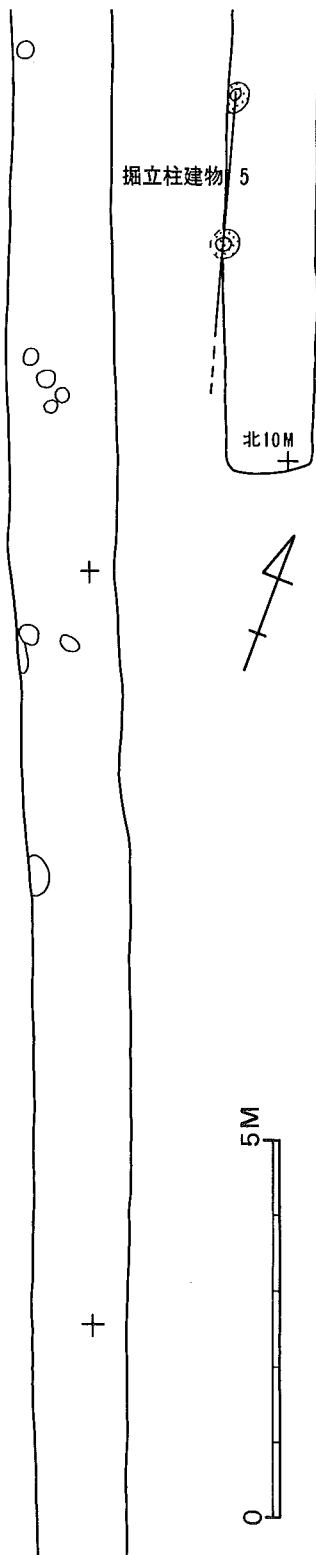
1. 北区遺構の概要 (第3図)

北区とは基準点から北に10m (以下、北・南何mと記す) の位置から始まり、調査区の北端の北135mに至る面積約250m²の範囲をいう。遺構の分布密度は調査地区全体から見ても薄く、北105m以北では検出されなかった。北105mの地点で幅3.3m、深さ約0.3mの溝1条 (溝1) を検出した。覆土は白灰色粘質土で遺物は出土しなかったが、近現代に属する時期のものと考えられる。北70~100mの間では幾つかの小穴や柱穴 (柱痕跡を認めたものをいう) を検出し、3棟分の掘立柱建物を認めるに至った。(掘立柱建物1・2・3) これらについては後述する。

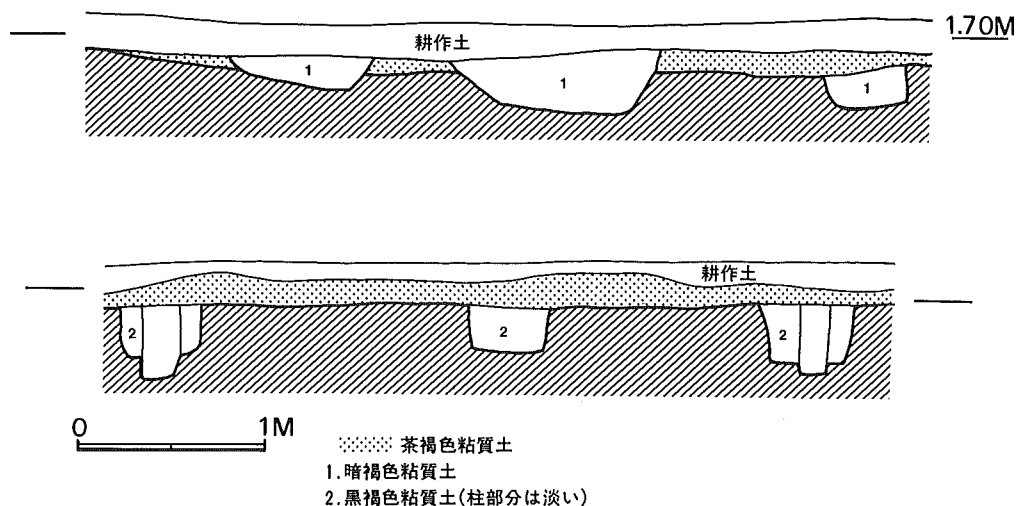
この他、北45m付近でも南北に柱穴が3個一列に並び (掘立柱建物4)、北15m付近にも西壁の断面に柱穴が2個観察された (掘立柱建物5)。

2. 層位 (第4図)

北区の層位は基本的には上から耕作土、遺物包含層の茶褐色粘質土、地山の黄褐色粘質土の順である。2層めの茶褐色粘質土中には古墳~鎌倉時代後半までの遺物が包含されているが、その殆んどが古墳時代のものである。第4図上の断面は北25~29.5mの地点における西壁の土層断面図で、この図に見るように遺物包含層の茶褐色粘質土はこの付近で次第に薄くなり南側へは続いていない。遺構の多くは地山で検出したが、耕作土の直下で検出できるものが少なかった。



第3図 北区遺構配置図 (その2)



第4図 北区土層断面図

3. 北区遺構各説

1) 掘立柱建物1

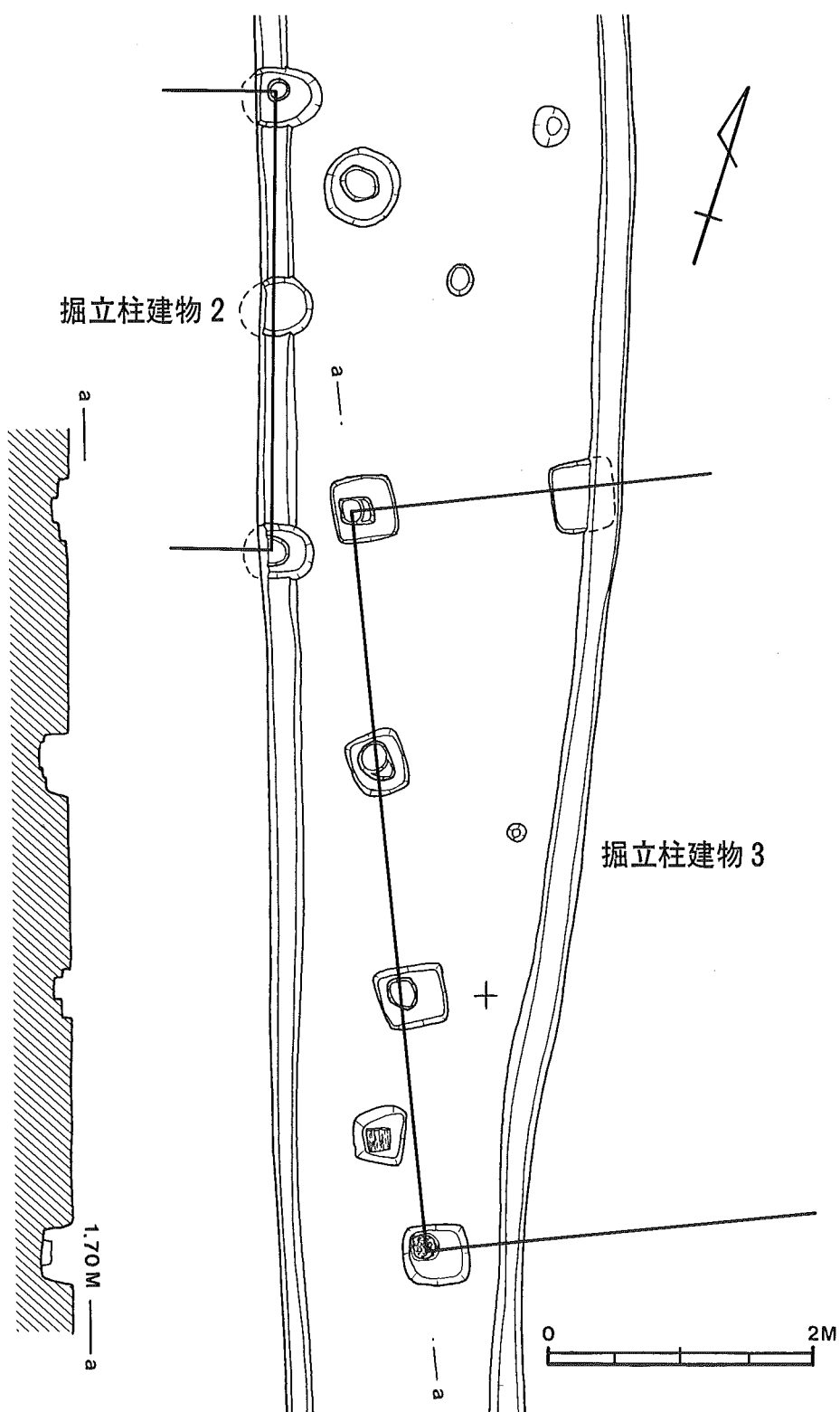
北96～100mの地点、トレンチの中央で3個の小穴を検出した。遺構検出面の海拔は1.70mである。2間分が検出されたが中世の建物と考えられる。柱間は3.8m。

2) 掘立柱建物2・3 (第5図、図版1)

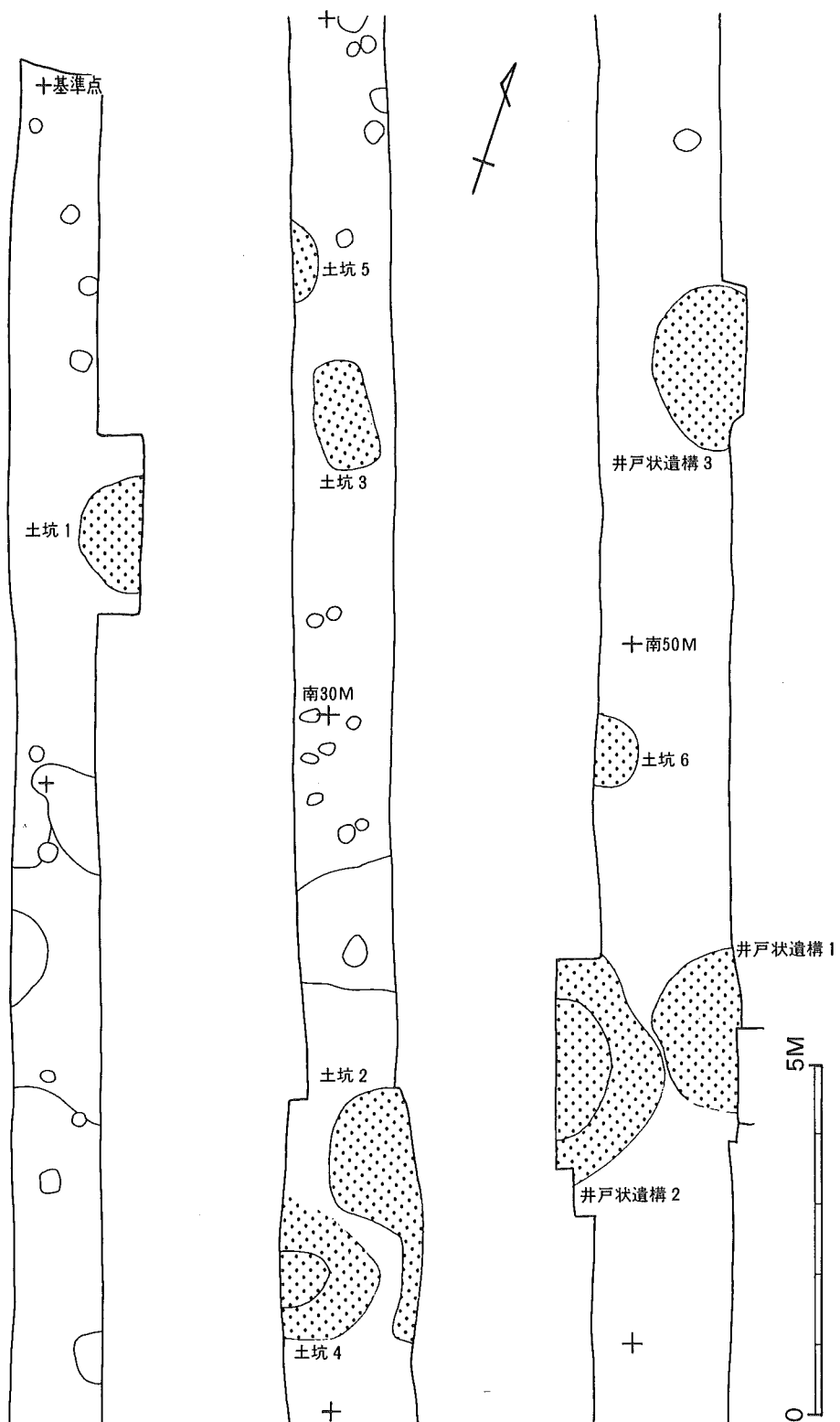
北65～100mに至る35m程の区間は、北区で最も遺構が集中した部分であり、小穴や柱穴が複数検出された。

掘立柱建物2はトレンチの西端で排水溝にかかる状況で検出した。遺構検出面の海拔は1.68mであり、2間分に相当するものと考えられる。柱間は南側が1.8m、北側が1.65mを計り総計で3.45mとなる。柱掘方の平面形は、径0.45m程の楕円形を呈し、遺構検出面から掘込底部までの深さは0.2～0.25mとほぼ一致している(第4図下参照)。柱穴の掘込み面は包含層の茶褐色粘質土の直下であり、中心の柱を除く2個の柱では柱穴部分の覆土は粘性が強く、掘方底部に柱跡の窪みも検出された。

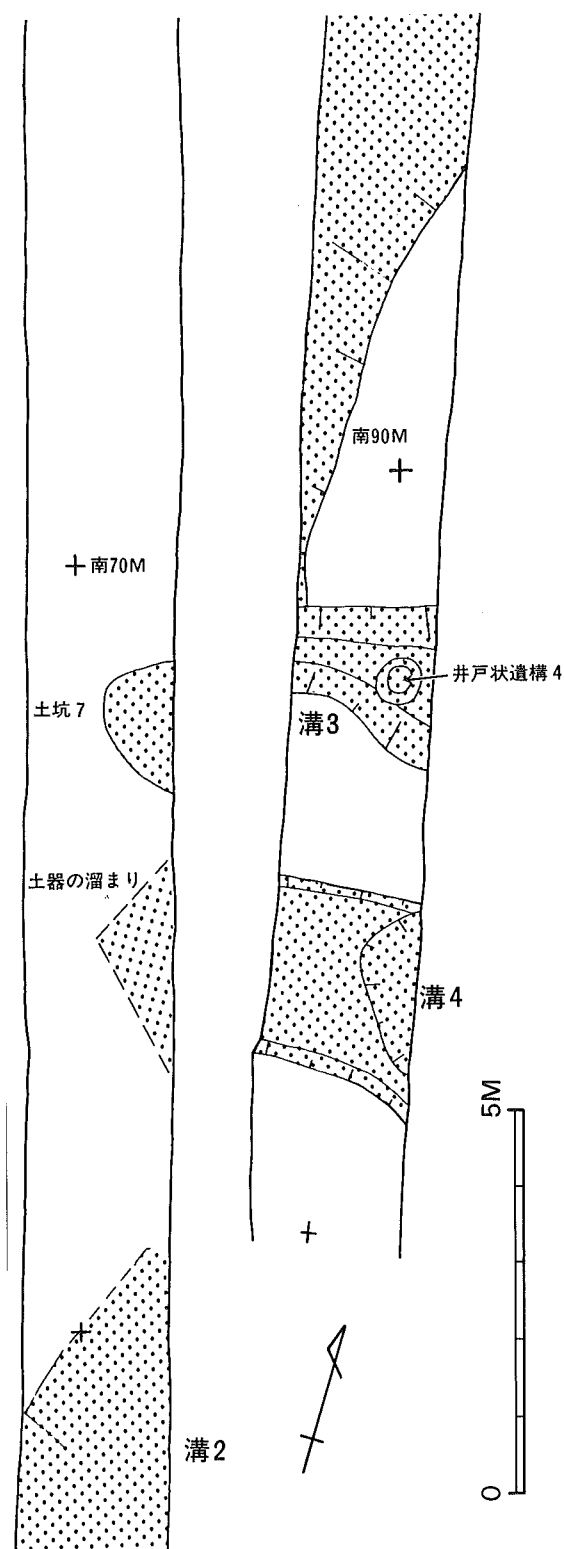
掘立柱建物3は北68～74mにかけての地点で検出し、掘立柱建物2に隣接した東南方向に位置する。南北方向は3間、東西方向はトレンチ内では1間分のみ明らかにできた。遺構検出面の海拔は1.55mである。柱間は南北1.85m、東西1.7mを計り、南北方向は総計で5.55mとなる。柱掘方の平面形は一边が0.4～0.45mの大きさを持つ隅丸方形を呈し、遺構検出面から掘方底部までの深さは0.1～0.25mの間で一定していない(第5図断面参照)。柱掘方内の覆土は黒褐色の粘質土であり、南北方向の柱掘方には全てのものにその底部で柱跡の窪みが検出できた。



第5図 掘立柱建物 2・3 実測図



第6図 中央区遺構配置図（その1）



第6図 中央区遺構配置図 (その2)

4. 中央区遺構の概要 (第6図)

中央区とは基準点から始まり、調査区のほぼ中央の位置にあたる南100mに至るまでの面積約200m²の範囲をいう。

遺構は当区全域に分布し、その年代は古墳時代前期と鎌倉時代の二時期に限られているようである。古墳時代前期の遺構としては、土坑7基(土坑1・2・4・5・6・7・8)、井戸状遺構1基(井戸状遺構3)、溝1条(溝2)、土器の溜まり1ヶ所、小穴複数が検出されている。これに対し、鎌倉時代の遺構としては土坑1基(土坑3)、井戸状遺構3基(井戸状遺構1・2・4)、溝2条(溝3・4)、小穴複数が検出されている。

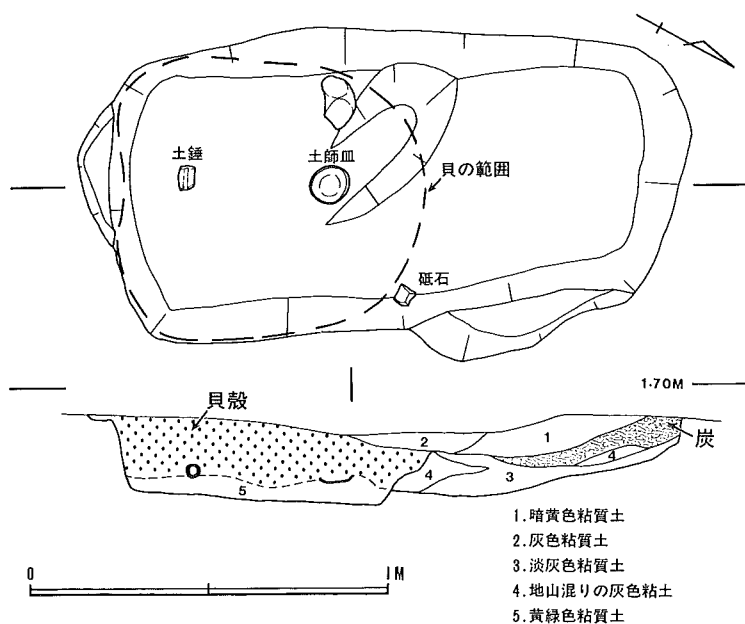
これらの遺構検出面は非常に浅く、耕作土を除けば直ぐに中世の遺構が確認できる。しかし、古墳時代の遺構は同じ面で僅かな痕跡が認められる程度で、遺構の範囲をはっきりとつかむことができなかった。このため、殆んどものが任意に掘り下げて一段低い高さでの検出となった。

5. 中央区遺構各説

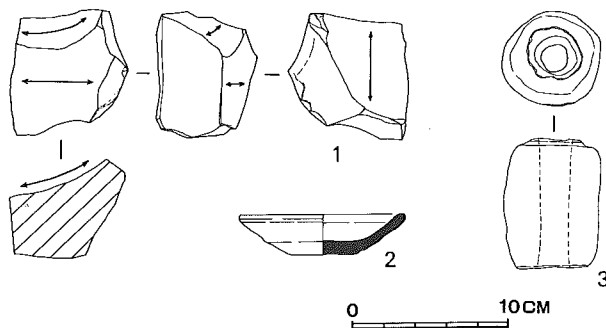
1) 土坑3と出土遺物

(a) 遺構 (第7図、図版2)

土坑3は南26mの地点に位置する。1.5m幅のトレンチのほぼ中央で検出されたために土坑の全体を調査することができた。遺構検出面の海拔は1.58mであり、検出面から底部までの深さは0.26mである。1.6×0.85mの隅丸長方形が崩れた



第7図 土坑3実測図



第8図 土坑3出土遺物実測図

あろう。1は砥石。その使用痕は3面で認められる。2は小皿。口径8.1cm、器高2.1cmを図る。口縁端部を丸く作り、底部は糸切りの後、ナデ消してある。3は陶鍾。焼成は堅緻で色調は白灰色を呈する。全長6.2cm、径4.5cmを計る。

2) 土坑2・4と出土遺物

(a) 遺構 (第9図、図版3・4)

土坑2と4は南35～39mの地点に位置する。2m幅のトレンチの東半分が土坑2、西半分が土坑4で両者共に完掘はできていない。

土坑2は不整形で、遺構検出面の海拔は1.75mであり耕作土を除去すると直ぐに遺構を検出

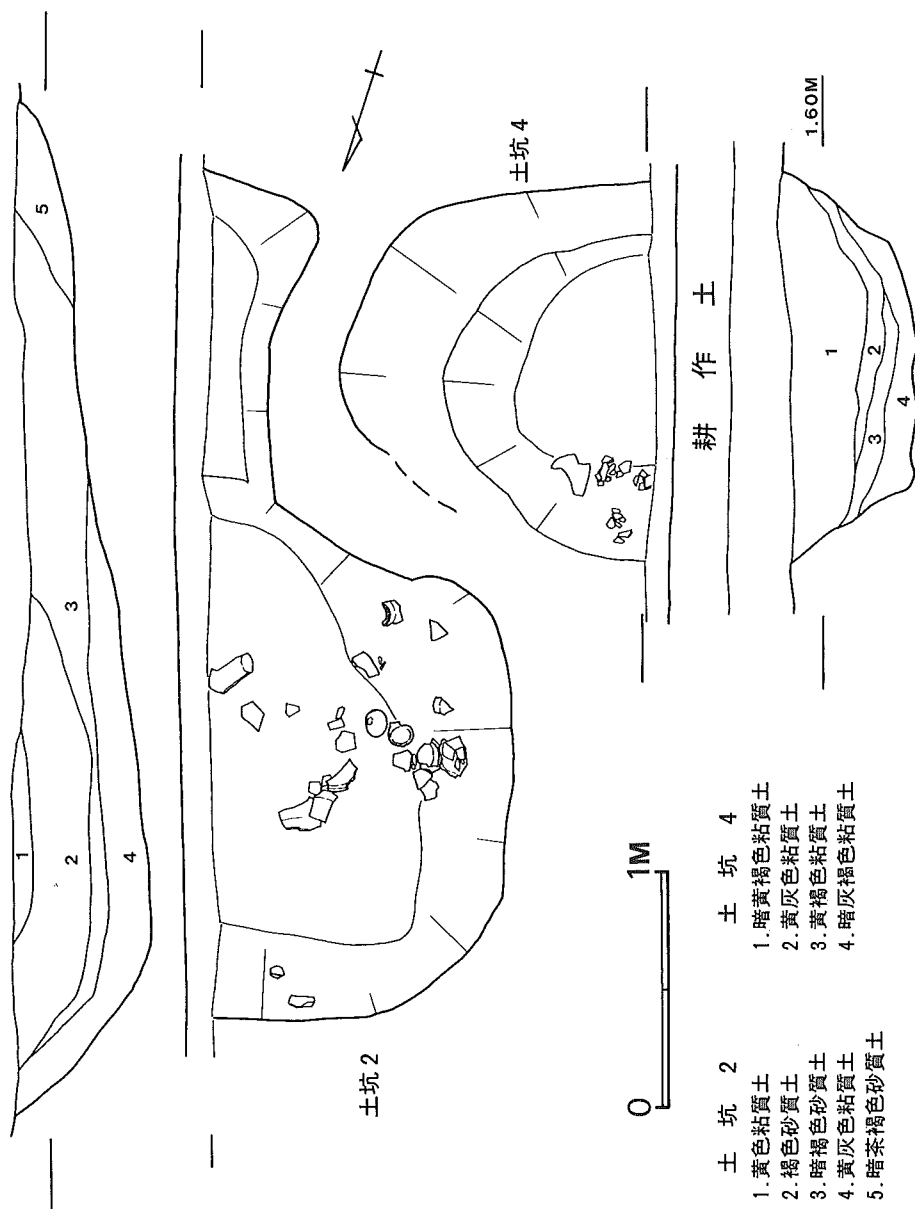
ような平面形態を呈している。

これはヤマトシジミの貝殻を投棄した土坑で、平面での貝殻の範囲は破線で示してある。土坑の輪郭を確かめ、東側半分を掘り下げ土層の観察を行った結果、土坑の北半分では炭が厚く堆積し貝殻が全く含まれていなかった。これに対し、南側は貝殻ばかりの純粋な堆積であった。このことから一時期に投棄したものと考えられる。

(b) 出土遺物

(第8図、図版12)

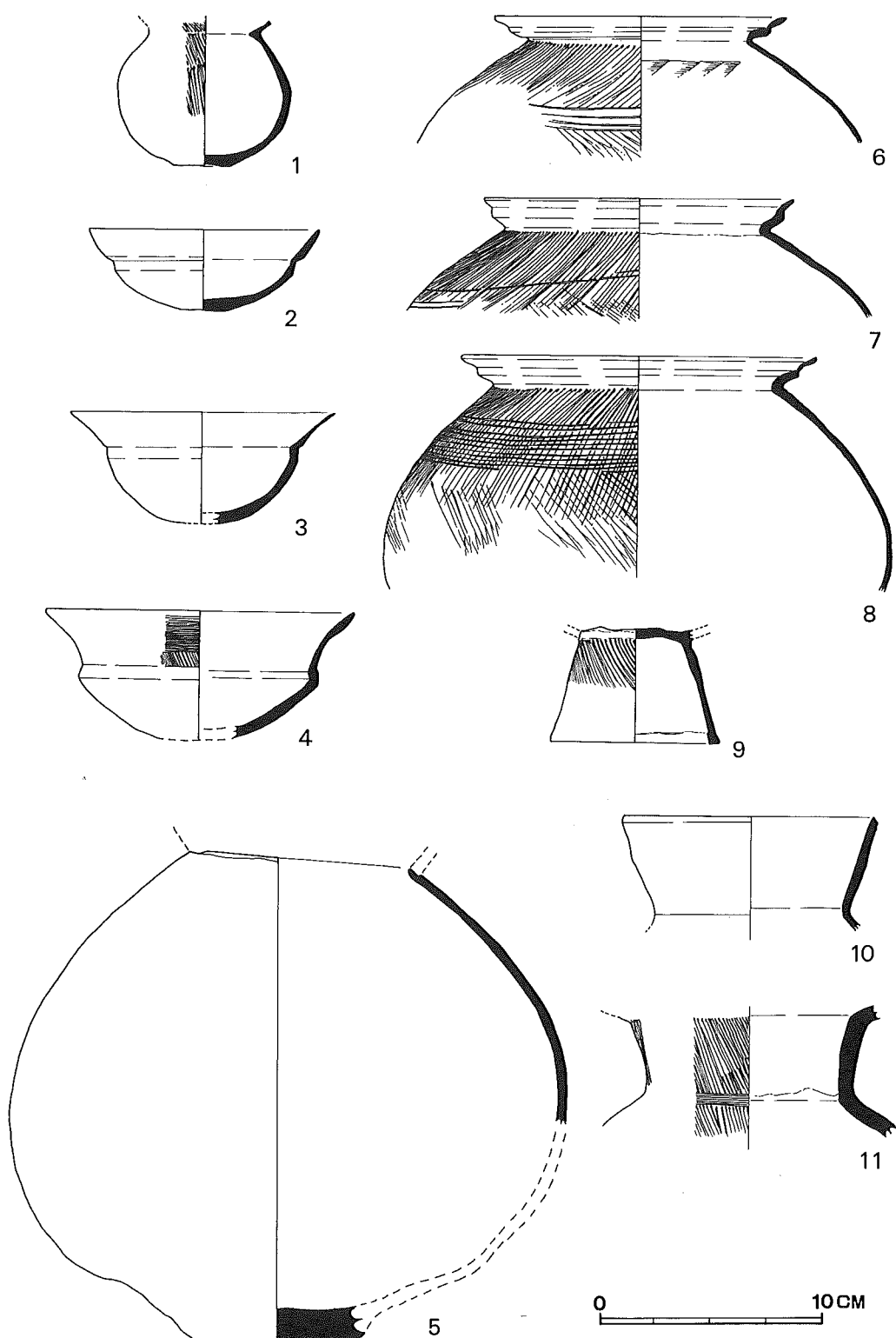
土坑3からの出土遺物は3点あり、貝層から出土した。したがって貝殻と一緒に投棄されたもので



第9図 土坑2・4実測図

できる。検出面から底部までの深さは0.55m、検出部での最大長は3.60m、幅は1.35mを計る。遺物は4層の黄灰色粘質土層から出土している。

土坑4は遺構検出面の海拔は1.70mであり、土坑2同様、耕作土の直下で遺構が検出できた。検出面から底部までの深さは0.51mである。検出部での最大長は1.65m、幅1.32mを計る。出土遺物は土師器片のみで、図示できなかった。両者はほぼ同じ時期と考えたい。

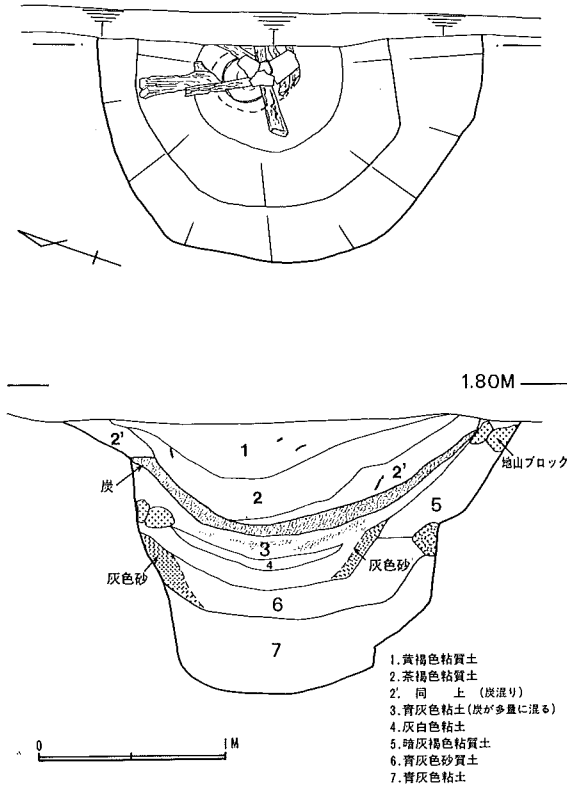


第10図 土坑2出土遺物実測図

(b) 出土遺物

(第10図、図版11)

土坑2からは多くの土師器片が出土した。破片も多いが、4層からは完形品はないものの旧状を復元できる資料が得られた。1は小型壺。口縁は欠損するが、内湾気味に外に開く形態と思われる。底部は若干窪む平底、外側はハケメ調整の後、ミガキ調整を施す。2～4は埴。4の口縁外側はハケメ調整の後、横ナデ調整を施す。5は壺型土器。球形胴化するが下膨れの形態を呈する。6～9は甕型土器。いわゆるS字甕で6・8は口縁内面の段が明瞭。9は脚部。8に対応するものと考えられる。脚部先端は折り返して肉厚に作り、段を持つ。



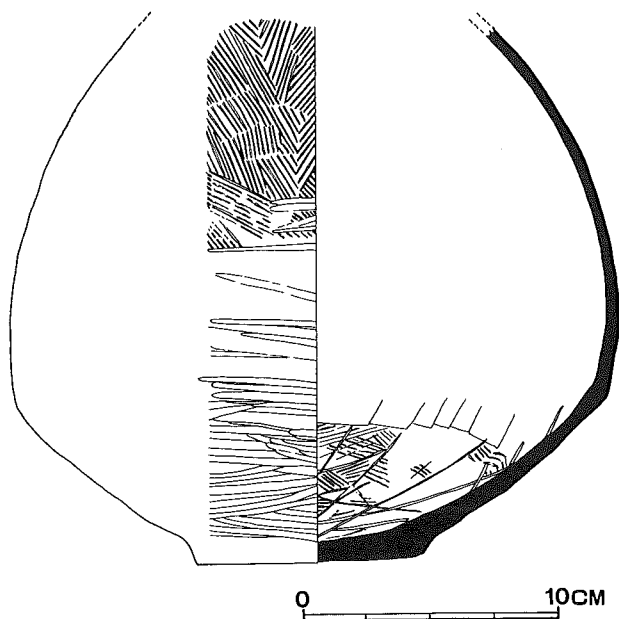
第11図 井戸状遺構3 実測図

3) 井戸状遺構3と出土遺物

(a) 遺構 (第11図、図版5上)

井戸状遺構3は南45mの地点に位置する。遺構検出面の海拔は1.60mであり、検出面から遺構底部までの深さは1.45mである。平面形態は不整の円形を呈するとみられ、検出部での最大径は2.05mを計る。遺構全体の6割程を検出したことになる。覆土は中程が炭層、3層は炭が多量に混じる青灰色粘土層というようにその中程に炭が多量にみられるのが特徴となっている。

底は径0.8m程の平坦部となり、更に一段掘り窪めた中に上半分を欠いた壺型土器を据えた集水升状の施設がみられた。この土器の中には細かい灰色の砂が充満していた。



第12図 井戸状遺構 3 出土遺物実測図

(b) 出土遺物

(第12図、図版13)

井戸状遺構 3 からは壺型土器を除けば少量の土師器片が出土しているのみである。遺構底部の壺型土器の保存状態は良かった。肩から上はないが現存高21cm、最大幅23.7cmを計る。最大径が胴部下半にある下膨れの形態をしているが球形胴化がみられる。外面調整はハケメ調整の後に胴部下半を入念にミガキ調整を施し仕上っている。内面調整は底部がハケメ調整後、放射状にミガキ調整を施す。胴部下半から上は横ナデ調整。外面の胴部下半から底部にかけては籠の痕跡と思われる放射状の変色部がある。

4) 井戸状遺構 1・2 と出土遺物

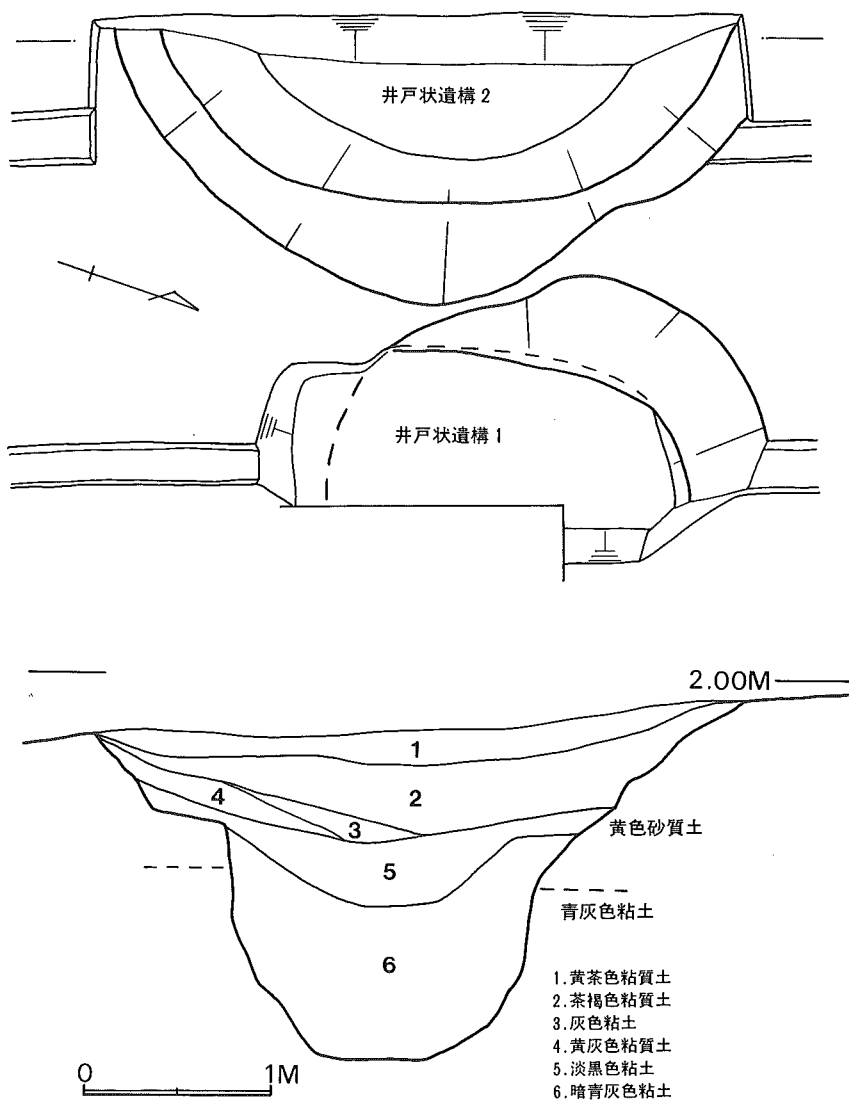
(a) 遺構 (第13図)

井戸状遺構 1・2 は南56mの地点に位置する。トレンチの東半分には井戸状遺構 1 が、西半分には井戸状遺構 2 が、それぞれ接するようにして検出された。しかし、両者に切り合い関係はみられなかった。

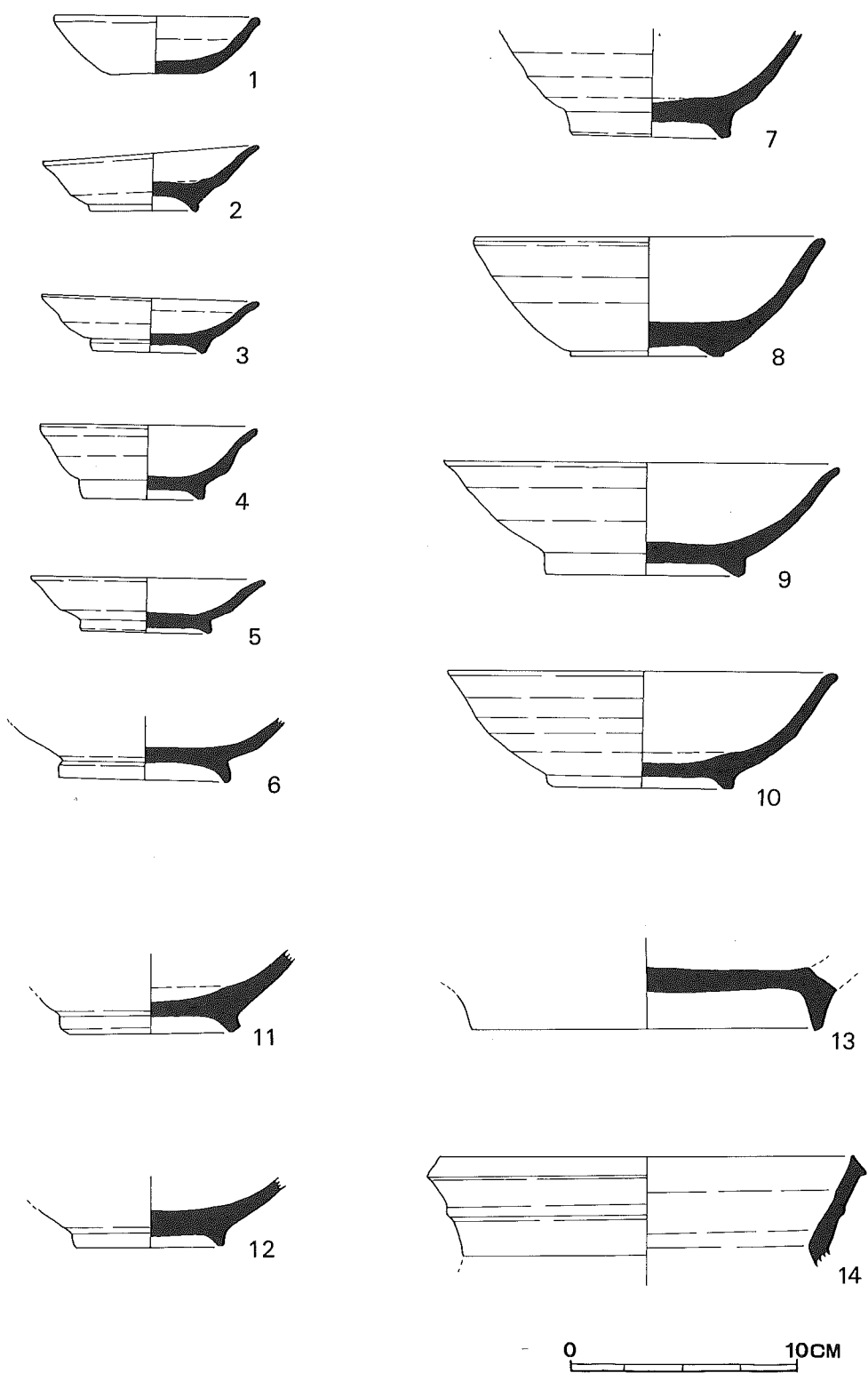
井戸状遺構 1 は遺構検出面の海拔が1.56mであり、検出面から遺構底部までの深さは残存部で1.56mである。遺構の大部分が県道の側溝に伴う集水升を埋設した部分と重なり、攪乱を受けている。調査時点では全体の約4分の1程が残っており、この部分の上面近くで複数の山茶碗と小皿が出土した。

井戸状遺構 2 は遺構検出面の海拔が1.90m (拡張部分の断面) であり、検出面から遺構底部までの深さは1.90mである。検出部の最大径は3.3mで遺構全体の約半分を検出した。

井戸状遺構 1 からは複数の遺物が出土したのに対し、この遺構からは少数の破片しか出土していない。両者は接しているにもかかわらず、この点に関しては差異がみられる。



第13図 井戸状遺構 1・2 実測図



第14図 井戸状遺構 1・2 出土遺物実測図

(b) 出土遺物 (14図、図版12)

井戸状遺構1からは山茶碗7点以上、小皿4点、土師質小皿1点が出土し、その他破片も多くみられる。1は土師質小皿。口径9.4cm、器高2.5cm。底部は糸切り末調整。2～5は小皿。完形に近い。口径は9.6～10cm、器高は2.6～3.1cm。体部は緩やかに内湾し口縁で外に開くが、4は内湾が急である。高台は三角形を呈するが、4は台形に近い。底部は糸切りの後、横ナデ調整を施す。5を除いて自然釉がかかる。6～10は山茶碗。6は高台が三日月状を呈する。底部は横ナデ調整。7は高台が台形状を呈する。底部は糸切り末調整。8～10は完形に近い。体部が丸く口径が大きいのが特徴である。8は口径15.9cm、器高5.4cm。口縁端部は丸く、潰れ高台。底部は調整不明。9は口径17.1cm、器高5.2cm。底部は糸切り末調整。10は口径16.5cm、器高5.4cm。底部は横ナデ調整。9・10は口縁が外に開き、高台は台形を呈する。共に器全体に炭が薄く附着している。

井戸状遺構2からは破片が数点出土した。11・12は山茶碗。高台は台形状。底部は糸切り末調整。11は内面のみ自然釉がかかる。13は大平鉢の底部と思われる。高台は三角形を呈する。高台径15.6cm (反転復元)。14は甕の口縁。口縁径18.3cm (反転復元)。

5) 土器の溜まりと出土遺物

(a) 遺構 (第15図、図版5下)

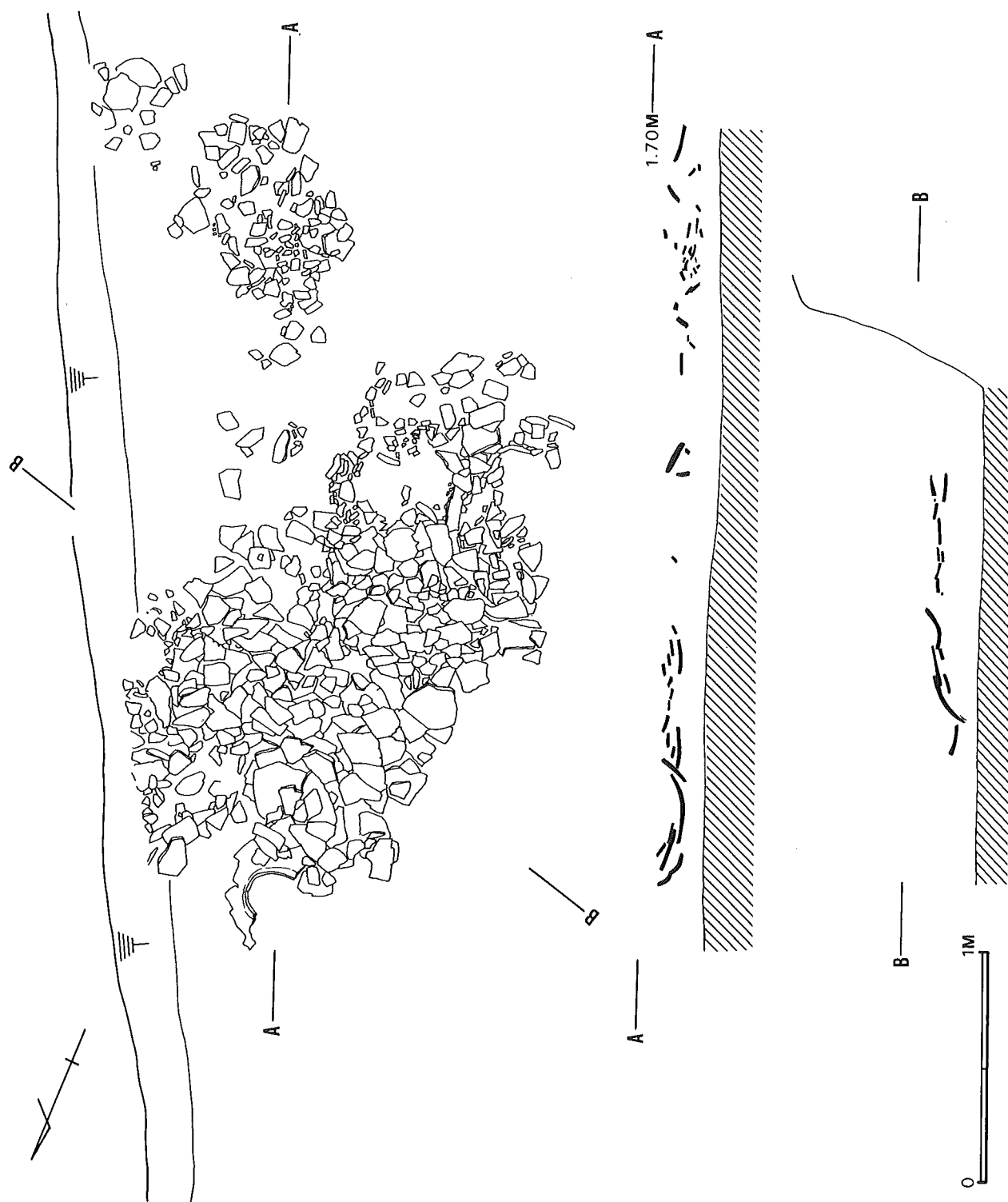
南75mの位置にあたるトレンチの東側には土師器片が集中する箇所があり、何らかの遺構に伴うものと考えられたが、遺構の範囲を確認することはできなかった。そこで、回りを掘り下げたり、トレンチの東壁の土層断面の観察を行った。断面では僅かに土層の違いが認められたが、面として把握できなかった。このためにここでは、いわゆる土器溜まりということで扱っておきたい。

土器群の検出面は海拔1.60～1.70mの範囲内で、その平面的な広がりにはL字型を呈している。器種は壺型土器に限られ、整理の結果7個体以上を確認した。

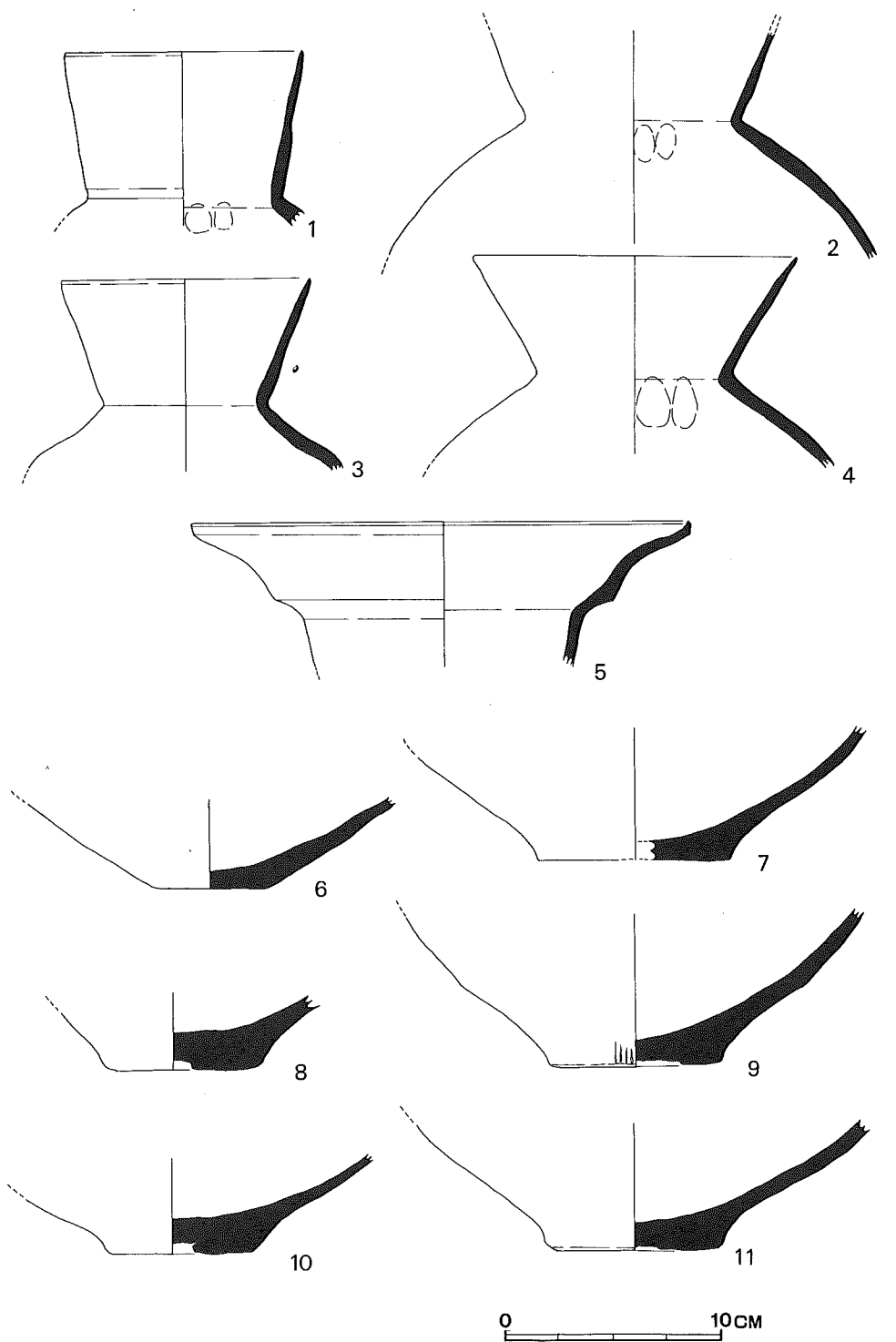
(b) 出土遺物 (第16図、図版13)

土器の溜まりからは多量の土師器片を得たが、保存状態が極めて悪く、復元できなかった。口縁部は単純口縁のものが6点、複合口縁が1点ある。単純口縁のものは、くの字状に外反し端部が丸くすぼまるが、1のように真っ直ぐに近く立ち上がるものもみられる。5は複合口縁で口縁の接合部分の作りはあまくなる。口縁内面にはミガキ調整が施されている。

底部は平底が3点、輪台状とでも言うべきものが4点見られる。8～11がそれで、底部に更に幅1cm前後の粘土紐を中心部を外し、時計回りに巻き付けることによって成形している。したがって、6・7に比べると底がかなり厚くなっている。11も同様だが、中心部にへそ状の高まりを作り、その回りに粘土紐を巻き付けるという技法を用いている。



第15図 土器の溜まり実測図



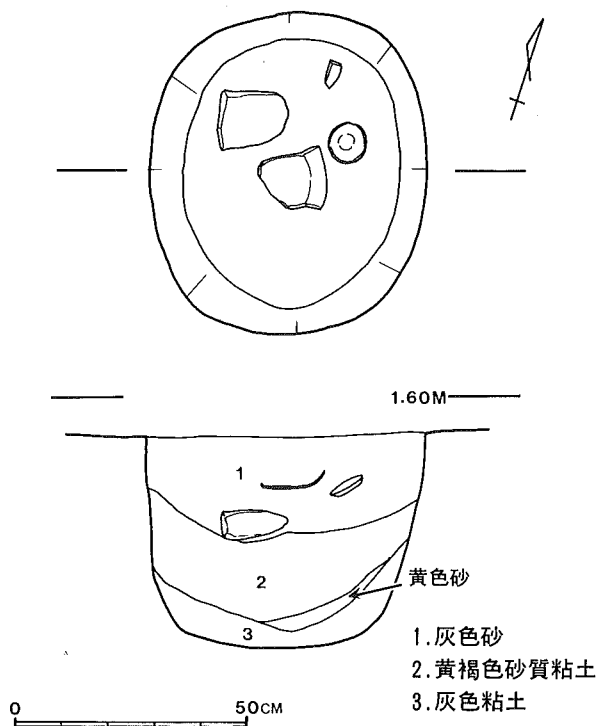
第16図 土器の溜まり出土遺物実測図

6) 溝3・井戸状遺構4と 出土遺物

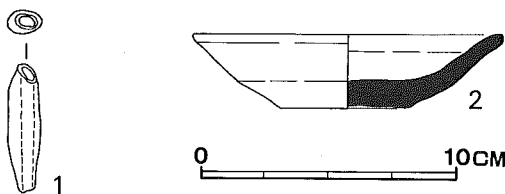
(a) 遺構 (第17図)

溝3は南93mの地点に位置する東西方向の溝である。トレンチの東壁での幅は2.1m、西壁では急にすぼまり1.0mとなってしまう。遺構検出面の海拔は1.40mで、溝底部までの深さ(東側)は0.18mを計る。溝内には茶色砂が堆積する。

井戸状遺構4は溝3が完全に埋没してしまった後にその上面から掘削したものである。遺構検出面の海拔は1.52mで、遺構底部までの深さは0.45mである。平面形態は長めの円形を呈し、直径0.6~0.7mを計る。この遺構は茶色砂層から掘り込まれているために壁面は柔らかいが、底部は黄色粘土層に達し、堅くひきしまっている。断面は壁の立ち上がりが急で、使用時に近い形とみられる。



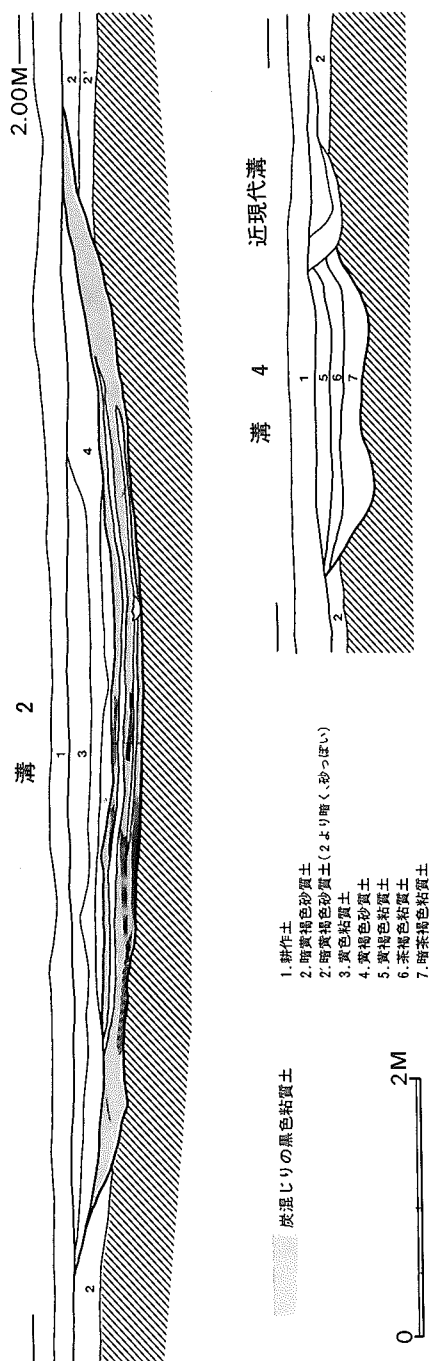
第17図 井戸状遺構4実測図



第18図 井戸状遺構4出土遺物実測図

(b) 出土遺物 (第18図、図版12)

溝3からの出土遺物はなかった。井戸状遺構4からは土錘、小皿、焼石が各1点、この他古墳時代の土師器片が出土した。1は土錘で2層から出土した。全長3.4cm、径0.9cmを計る。2は小皿で1層から出土した。口径8.3cm、器高1.9cmを計る。底部は糸切りの後、ナデ消してある。



第19図 溝2・4土層断面図

7) 溝2・4 (第19図、図版6)

溝2は南80～90mに位置し、トレンチを斜めに横切るような形で検出された。遺構検出面の海拔は1.68mで、検出面から溝底部までの深さは西壁で0.5mである。トレンチに対し斜め方向に位置することから西壁で取った土層断面図では幅が9mあるが、実際には半分の4.5mである。

溝内の覆土は、下半分では炭混じりの黒色粘質土と黄灰色粘質土が交互に堆積している。遺物は磨滅の激しい古墳時代の土師器片が少量、溝底部で出土した。

溝4は南95～98mに位置する東西方向の溝である。遺構検出面の海拔は1.70mで、検出面から溝底部までの深さは西壁で0.45m、幅は2.5mである。東側では幅が広がると共に深さも0.6mと深くなる。北端は近現代の新しい溝によって一部削られている。

8) その他の遺構

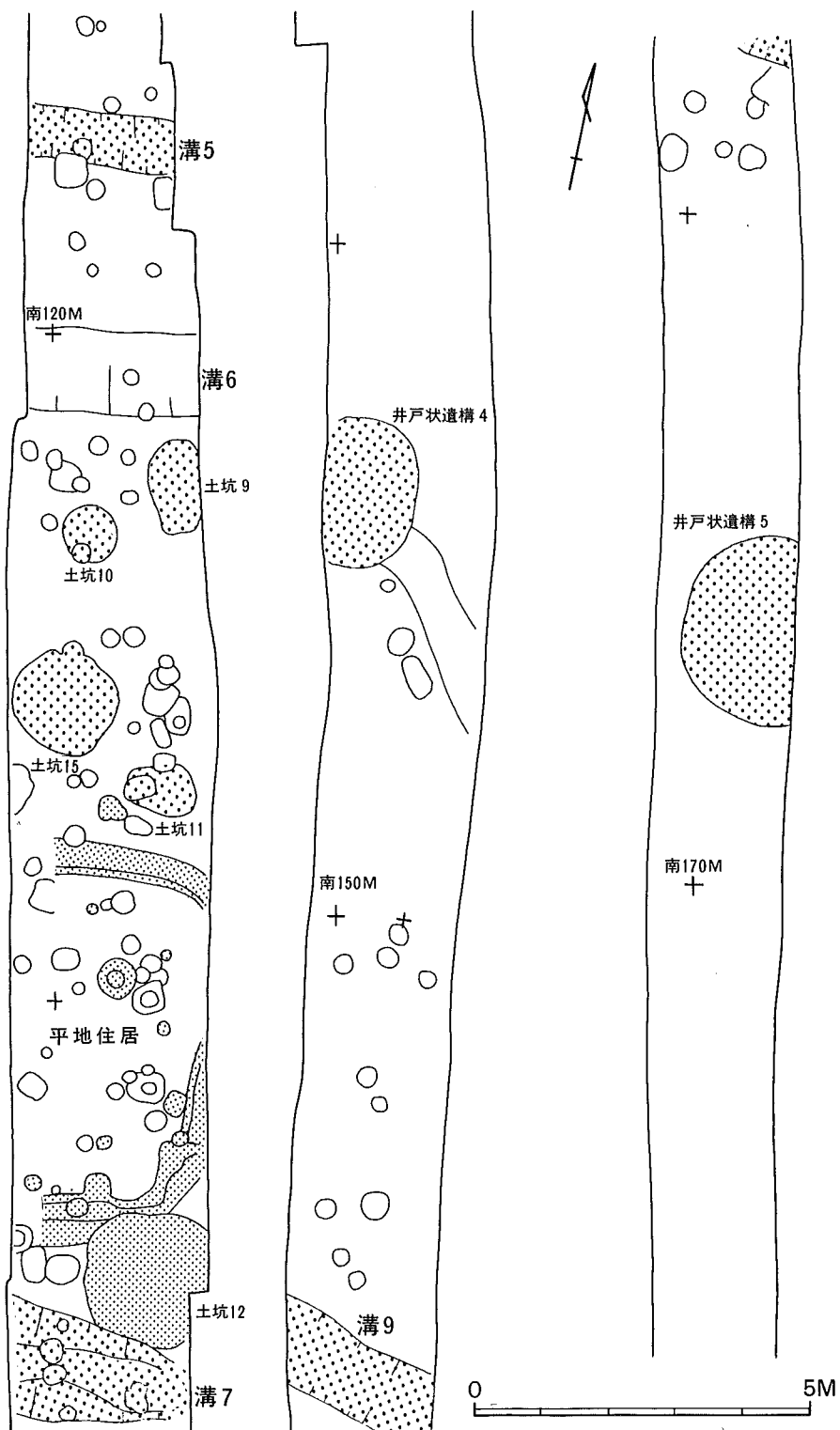
トレンチの端で検出したために、全体が不明な遺構をここで一括して報告する。

土坑1は南6mに位置する。トレンチの東壁で確認し、トレンチを拡張した。平面形態は不整円形を呈すると考えられる。遺構検出面の海拔は1.68m(断面で)、検出面から底部までの深さ0.5m、断面での最大幅2.15mを計る。古墳時代の土師器片が出土した。

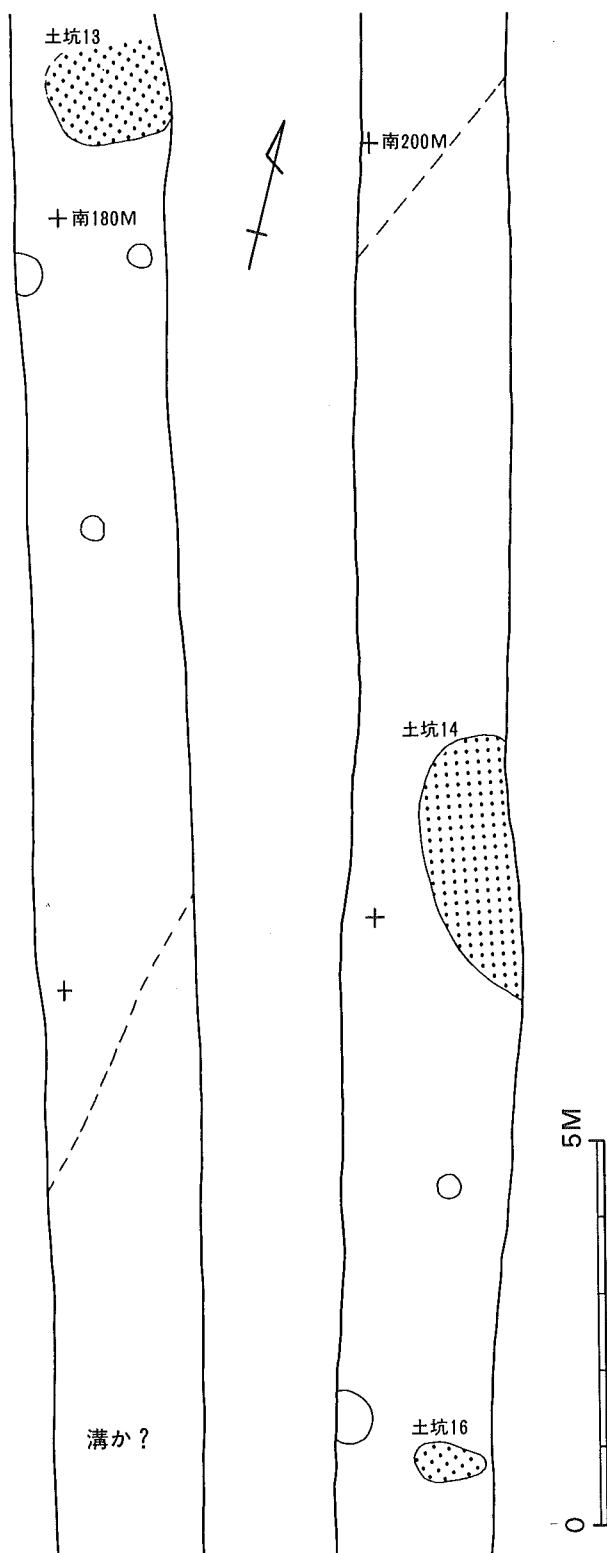
土坑5は南24mに位置する。トレンチの西壁際で確認した。遺構検出面の海拔は1.60m、検出面から底部までの深さ0.27m、断面での幅1.3mを計る。遺物はない。

土坑6は南52mに位置する。トレンチの西壁際で確認した。遺構検出面の海拔は1.60m、検出面から底部までの深さ0.25m、断面での幅1.0mを計る。遺物はない。

土坑7は南72mに位置する。トレンチの東壁で確認しトレンチを拡張した。平面形態は不整円形を呈すると考えられる。遺構検出面の海拔は1.76m(断面で)、検出面から底部までの深さ0.7m、断面での幅2.63mを計る。土坑底部付近に炭の厚い堆積があった。古墳時代の土師器片が出土した。



第20図 南区遺構配置図 (その1)



6. 南区遺構の概要 (第20図)

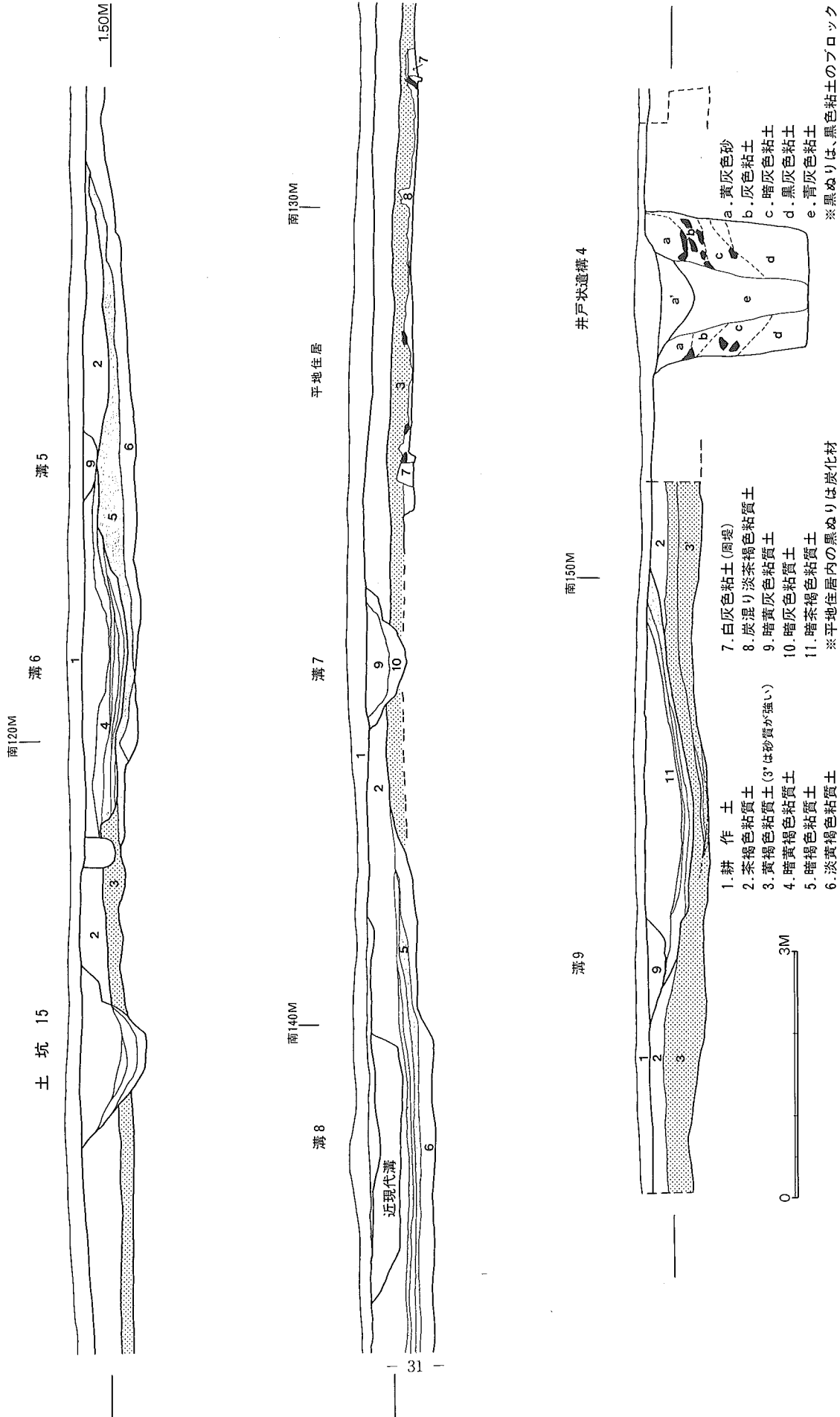
南区は南100mの位置から始まり、調査区の南端である南314mに至る面積約450㎡の範囲をいう。遺構の分布状況は南115～140mの範囲については調査区内で最も遺構が密集しており、遺構検出面も3面が確認された。最上面は耕作土の直下で中世段階の遺構が、その下面には古墳時代の遺構が上下2面にわたって確認された。

このような状況に対し、南140m以南の範囲は遺構がまばらとなり、南217mで検出した土坑16を南限として明瞭な遺構は確認できなかった。南200～210mの地点には土師器片が集中し、面としては識別できなかったが土層断面に僅かな違いが認められたことから、溝が存在したものと考えている。

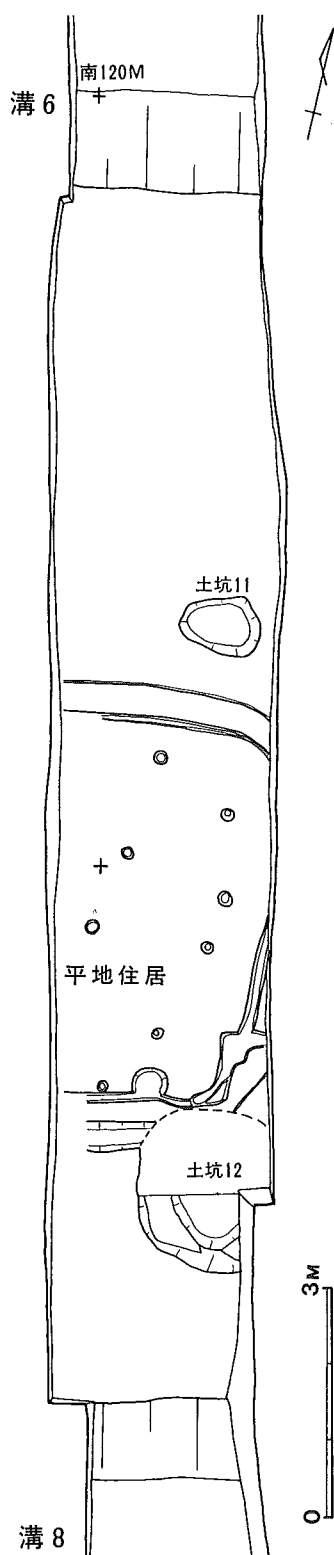
今回の調査課題の一つに、従来考えられてきた青木遺跡の南限を確認することがあった。

土坑16以南では遺構の検出を果たせなかったが、トレンチの南端まで遺物がまんべんなく出土することから南限を従来通りに考えた。

第20図 南区遺構配置図 (その2)



第21図 南区土層断面図



第22図 下層の遺構配置図

7. 南区層位 (第21図)

南区の層位は基本的には上から耕作土、茶褐色粘質土、黄褐色粘質土、地山の黄色砂質土の順である。2層めの茶褐色粘質土は南110m付近から始まり、南へと広がっている。平安時代以降の遺構がこの土層の上面から検出される。3層めの黄褐色粘質土は南121m付近から始まり、南へ行くにしたがって厚く堆積する。この土層の上面からは数は少ないが古墳時代の遺構が検出される。

第21図は南112～157mの地点における西壁の土層断面である。

8. 南区遺構各説

南115～140mの範囲では、3層にわたって遺構が検出されたため下層、中層、上層の遺構として層別に一括して扱う。

1) 下層の遺構と出土遺物

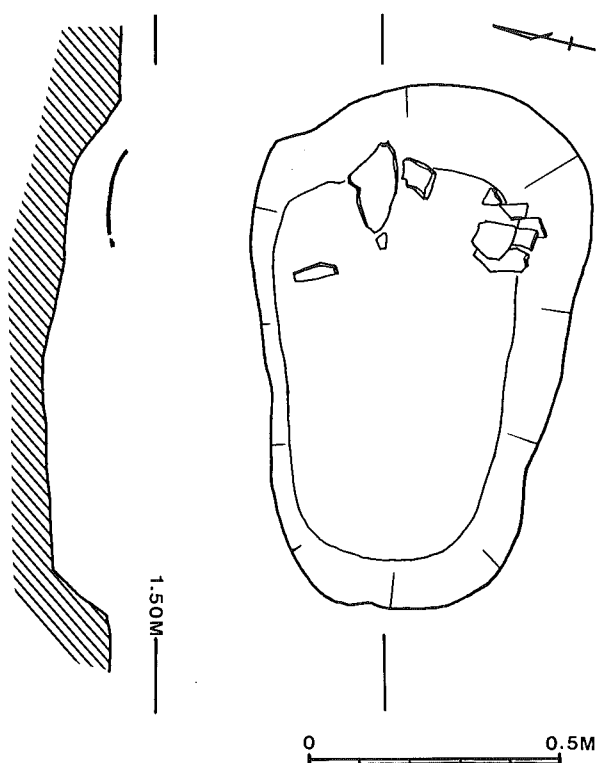
(a) 遺構 (第22図、図版7・8・9)

下層の遺構として、北から溝6、土坑11、平地住居、土坑12、溝8の各遺構が見られる。遺構検出面の海拔は1.30m前後である。

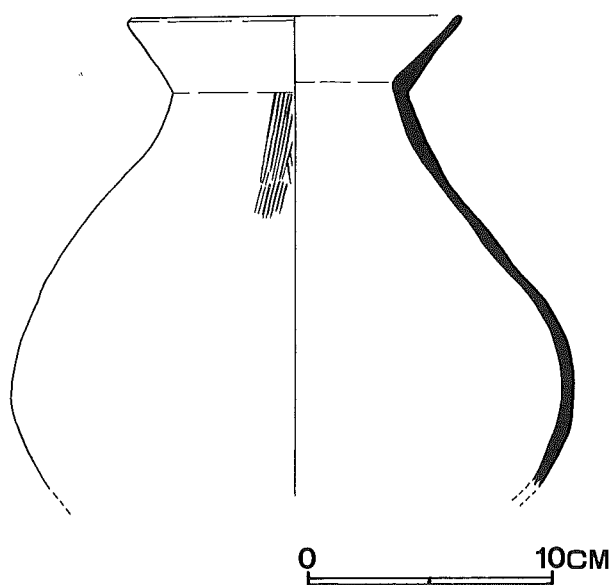
溝6は南121m付近から傾斜し始める浅い溝で、南112m付近で徐々に浅くなるが、立ち上がりを確認できなかった。遺構検出面から溝6の底部までの深さは0.2～0.25m程である。

土坑11 (第23図) は南127mの地点、トレンチの東側で検出した。遺構検出面から底部までの深さは1.6mである。中心部では1.03×0.6mの規模を持つ不整形の土坑で、西側では幅が広がり0.67mを計る。

土坑12は南133～135mの地点、トレンチの東側で検出した。北端では一部、平地住居の周堤と溝を切っている。時間の制約から土坑の北半分は未掘のままで埋戻した。径約2.0m程の円形の土坑と考えられ、遺構検出面から底部ま



第23図 土坑11実測図



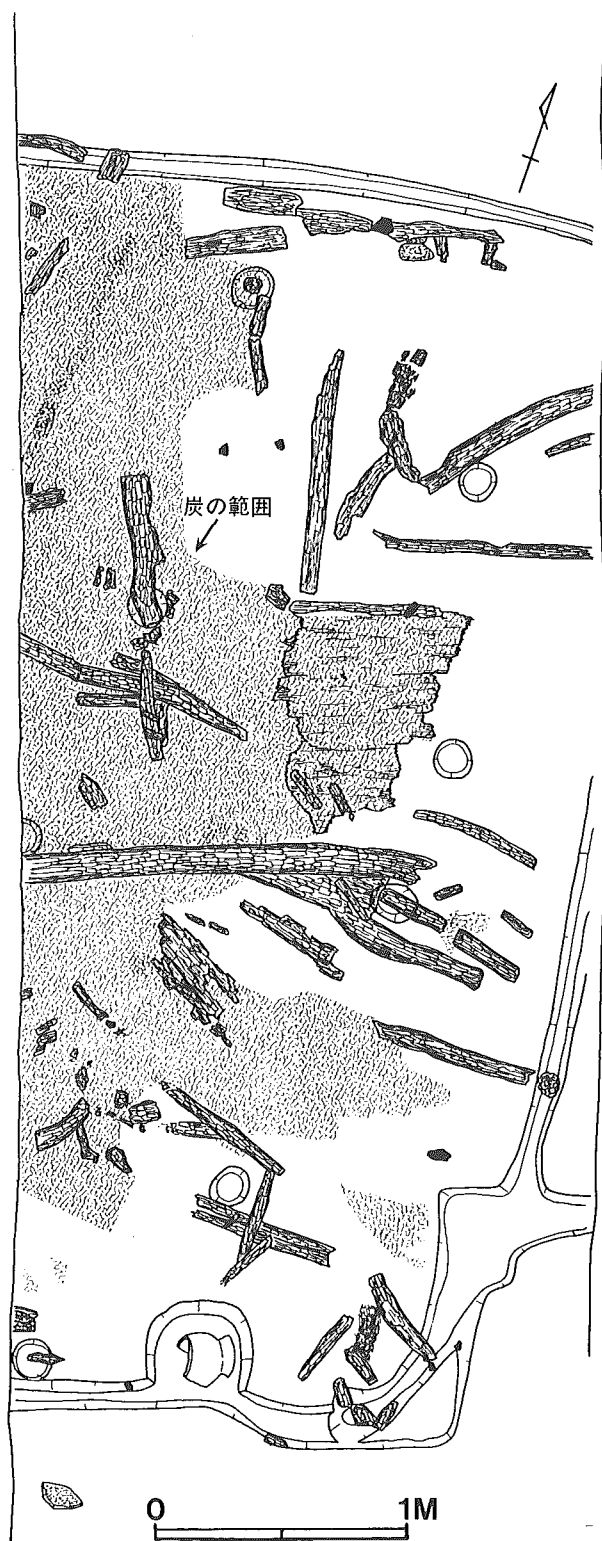
第24図 平地住居出土遺物実測図

での深さは0.65mを計る。

溝8は南137m付近から傾斜し始める溝であるが、南側の立ち上がりは確認できなかった。恐らく、井戸状遺構5の付近で立ち上がるものと考えられる。

平地住居は南127～134mの範囲に位置する。この範囲の上層の調査を行っていた段階で、柱穴の底に炭が薄く広がるという状況があったので、下層に別の遺構面が存在することを想定し、周辺を掘り下げることとなった。当初、炭の正体をつかむことを中心にして調査を進めたが、炭の広がりがなくなる外側で灰白色の粘土を用いた周堤が巡ることが判明し、平地住居と理解することになった。

トレンチ内では住居の東側のほぼ半分を検出したことになる。検出した部分での規模は南北6.1m、東西2.8mを計る。床面の回りには幅0.15m前後の排水溝が巡り、更にその外側には北側で幅0.4m、南側で0.25m、高さ0.2m前後の灰白色粘土で造った台形状の周堤が巡る。東南のコーナーでは排水溝の幅も倍以上に広がり、周堤を切って住居の外側へと延びている。南側の排水溝に取り付くように隅丸方形の貯蔵穴（0.45×0.45m、深さ0.13m）が設けられ、中に胴部が半分欠損する壺型土器が廃棄されていた。南側には周堤の外にもう1条、溝が見られるが、北側には存在していなかった。この溝



第25図 平地住居炭・炭化材出土状況図

は幅0.4mと、周堤内のものに比べると倍以上の幅を持っている。柱穴は8個分が検出された。

この住居を検出するきっかけとなった炭や炭化材の出土状況を示したのが第25図である。ここには焼土が全くと言っても良い程見られないこと、土器の遺存状況の悪いことから考えて廃屋となった後に屋根が倒壊し、このような状況で埋没したものと理解している。

(b) 出土遺物

(第24図、図版13)

下層の各遺構からはそれぞれ土師器片が少量ながら出土している。しかし、図化できるものは平地住居の貯蔵穴内から出土した壺型土器のみである。胴部より下半は欠損し、胴部も反転復元である。現存高19.5cm、口径13.8cm、胴部下半の最大幅が23.1cmを計る。頸部から胴部にかけての外周調整はハケメ調整が一部で観察できる。

2) 中層の遺構

(a) 遺構 (第26図)

中間でもう一つ別の遺構面を確認した。遺構検出面の海拔は1.50m前後である。この時期には下層に見られた北側の溝6、南側の溝8が幅を狭めながら引き続き存在している。

溝6の幅は3.5mとなり、遺構検出面から溝底部までの深さは0.35mである。覆土は黒褐色粘質土と黄褐色粘質土が交互に堆積している。

溝8でも溝6同様に幅が狭くなり、幅は6.5m程となる。遺構検出面から溝底部までの深さは0.25mである。覆土は黒褐色粘質土と黄褐色粘質土が交互に堆積する。南北両方の溝に挟まれた高まりには北側で土坑9・10基の土坑が、トレンチの東側の部分には複数の柱穴と小穴がそれぞれ検出された。

土坑9は南123mの地点、トレンチの中央に位置する。遺構検出面から底部までの深さは0.17mであり、径0.9mの円形を呈する。遺物はなかった。

土坑10は南122mの地点、トレンチの東端に位置し、遺構は調査区域外に広がる。遺構検出面から底部までの深さは0.25m。断面での最大幅は1.46mである。古墳時代後期の須恵器片が1点出土した。

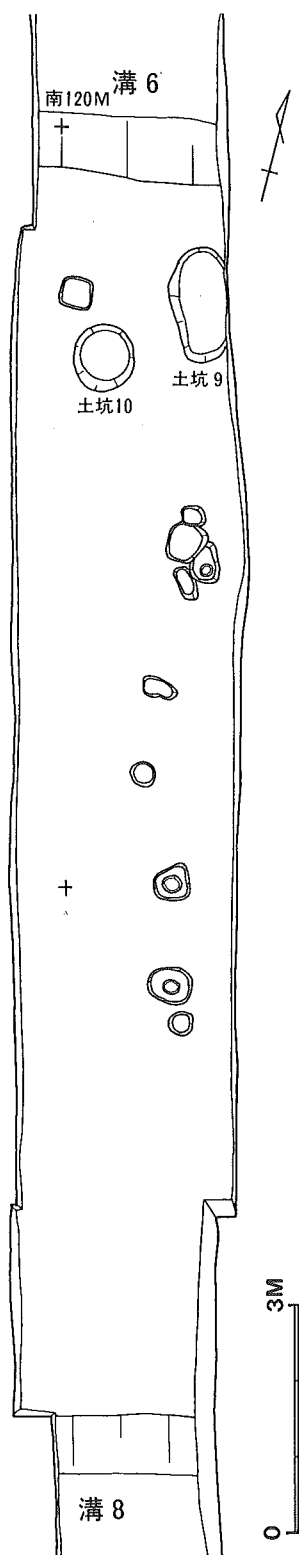
3) 上層の遺構と遺物

(a) 遺構の概要 (第27図)

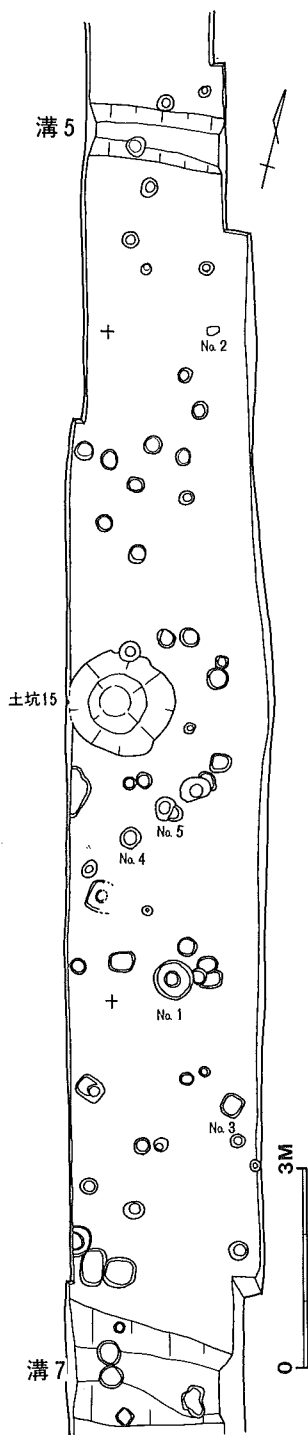
上層は耕作土の直下に遺構面がある。遺構検出面の海拔は1.80m前後である。この時期の遺構には南117mの地点で溝5(幅0.8m、検出面からの深さ0.2m)、南135mの地点で溝7(西壁での幅1.8m、検出面からの深さ0.46m)を検出し、この両溝で区切られた17mの区間から多数の柱穴や小穴、土坑1基(土坑15)が検出された。

(b) 柱穴 (第28・29図、図版10下)

柱穴の中で構造上特徴を持つものを集めた(位置は第27図参照)。1は遺構検出面から底部までの深さが0.24m。

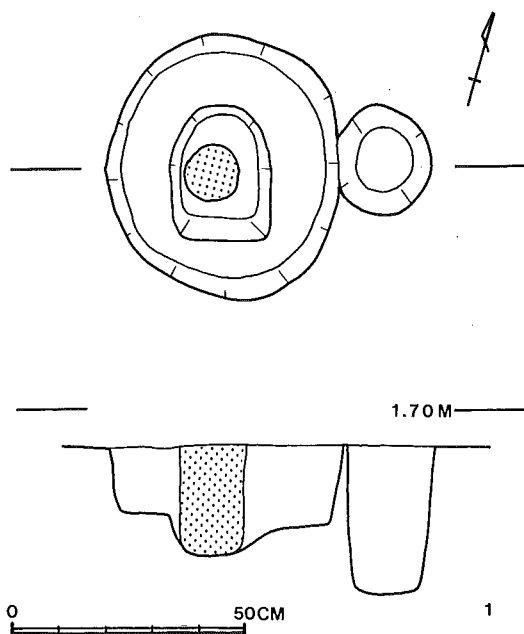


第26図 中層の遺構配置図

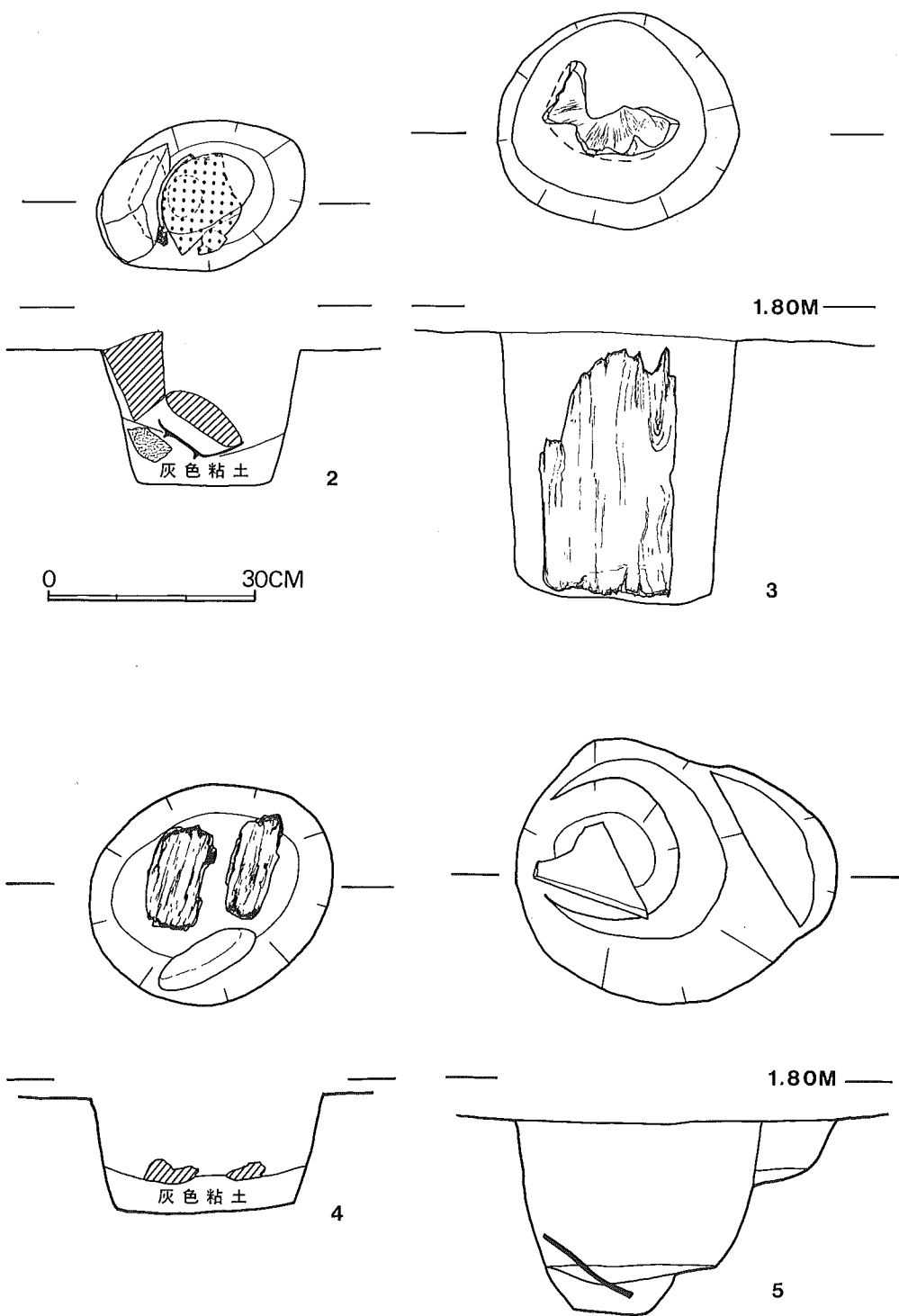


第27図 上層の遺構配置図

径0.5~0.56mの円形を呈する。底部中央には一段掘り下げられた部分がみられる。焼失したらしく柱は炭化し、その回りに焼土がみられる。この柱の底部は角が取れて丸くなっており、鋸を用いるのではなく、焼き切りの技法を用いて切断したものと考えられる。2は遺構検出面から底部までの深さが0.2m。0.3×0.22mの楕円形を呈する。この柱穴の構造は底に灰色の粘土を詰め、その中に炭の塊を1個混ぜる。粘土の上面には口縁を欠いた山茶碗を置き、その上に偏平な礫を被せ、別の角礫を壁に沿って置くというものであった。3は遺構検出面から底部までの深さが0.38m。径0.3mの円形を呈する。この柱穴は柱が残っていた。丸太を半裁した柱と考えられる。4は遺構検出面から底部までの深さが0.17m。径0.31~0.34mの円形を呈する。この柱穴の構造は底に灰色の粘土を詰め、その上面に礎板を敷き、偏平な礫を添えるというものであった。5は遺構検出面から底部までの深さが0.28m。0.46×0.36mの不整円形を呈する。内部に2段の平坦部を設け、柱を受ける部分には須恵器片を置いている。



第28図 上層柱穴実測図 (No. 1)



第29図 上層柱穴実測図 (No. 2 ~ No. 5)

(c) 土坑15と遺物 (第30図、図版10上)

土坑15は南125mの地点に位置する。トレンチの西壁に少しかかるが、遺構のほぼ全部を検出した。遺構検出面の海拔は1.85mで検出面から底部までの深さは0.55mを計る。平面形態は径1.55mの円形を呈する。底面は径0.4m程の平坦部を設け、壁面は急斜面で摺鉢状となっている。

遺物 (第31図、図版13)。1・2は灰釉陶器の碗。共に漬け掛けがみられる。1は口径13cm、器高4.8cm。体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁近くで内湾する。高台は台形状で高く、底部はナデ調整を施す。2は口径17cm、器高7.5cm。体部は丸みを帯びて立ち上がる。高台は台形状で高く、端部付近に面取りを施す。底部は糸切りの後、横ナデ調整を施す。3は須恵器の高杯脚部。4は陶器の壺、口頸部。5は大甕の口縁部。端部は欠損する。復元口径19.5cm。

4) その他の遺構

井戸状遺構4は南144m、トレンチの西側に位置する。遺構検出面の海拔は1.85m。検出面から底部までの深さは2.0mであり、径2.0mの円形を呈する。覆土は灰色粘土で、中に黑色粘土のブロックが多く混じる。遺物はなかった。

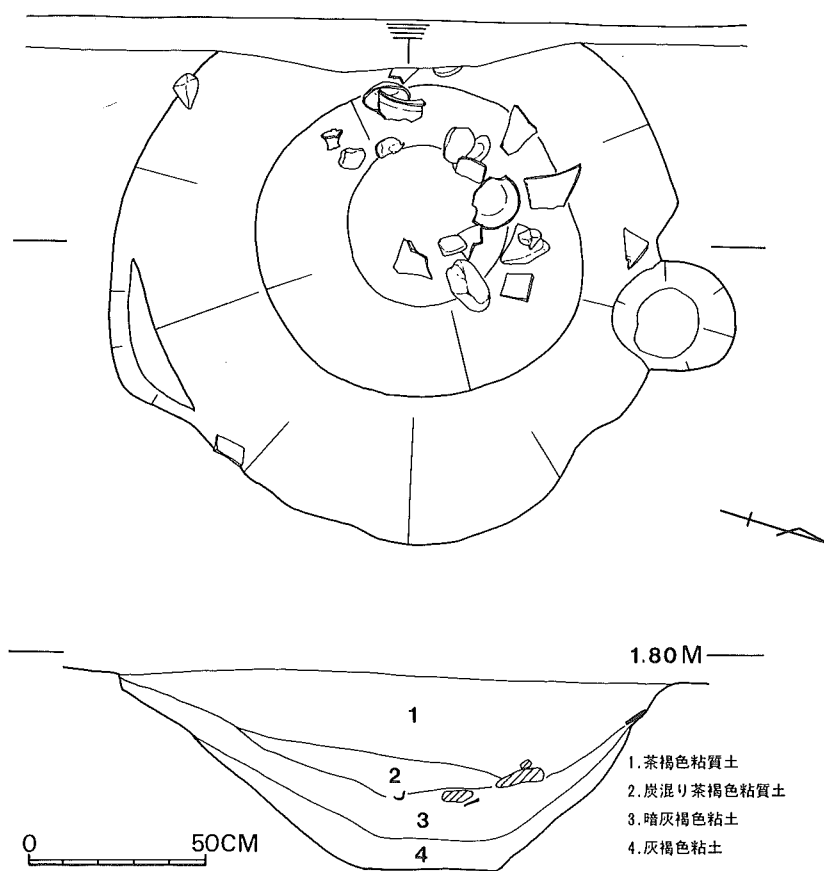
井戸状遺構5は南166m、トレンチの東側に位置する。遺構検出面の海拔は1.65m。遺構検出面から1.1m掘り下げて中断した。東壁での幅は2.9mで円形を呈する。覆土は井戸状遺構同様、灰色粘土である。遺物はなかった。

溝9は南156mに位置する。遺構検出面の海拔は1.80m。検出面から溝底部までの深さは0.2mである。幅は1.1mと狭いが溝7と平行している。遺物はなかった。

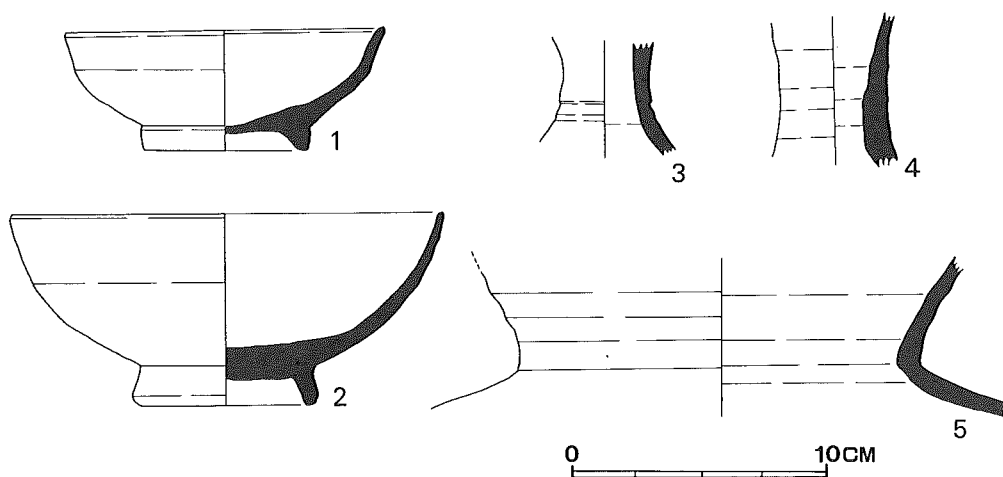
土坑13は南178mに位置する。遺構検出面の海拔は1.45m。検出面から底部までの深さは0.2mである。北側は暗渠排水で攪乱を受け、東はトレンチ外へと続くので本来の規模は不明。検出部で1.0×1.2mの隅丸方形を呈する。古墳時代の土師器片が数点出土した。

土坑14は南210m、トレンチの東側に位置する。遺構検出面の海拔は1.35m。遺構の中心はトレンチの外にある。検出部での遺構底面までの深さは0.2m、断面での幅3.0mを計る。遺物はなかった。

土坑16は南217m、トレンチの東側に位置する。遺構検出面の海拔は1.63m。検出面から底部までの深さは0.04mであり、底部がかろうじて残っていた。0.83×0.55mの不整形の土坑。山茶碗片が数点出土した。



第30図 土坑15実測図



第31図 土坑15出土遺物実測図

IV ま と め

1. 遺構のまとめ

ここでは遺構について若干の問題点を整理する。

掘立柱建物 2 この建物の時期は、柱掘方内から古墳時代の土師器片が出土することから古墳時代に考えている。

掘立柱建物 3 掘立柱建物 3 は柱掘方内から古墳時代の土師器片のみが出土したので、建物の時期は古墳時代以降ということになる。しかし、柱掘方の平面形が隅丸方形を呈することを重視し、この遺構に近い北ハサマ遺跡、その周辺部での調査で奈良時代の須恵器が、かなりまわって出土する状況を考慮すると奈良時代の可能性が高いと思われる。

不整形の土坑群 土坑 1・2・4・5・6・7 は中央区に集中し、その時期は古墳時代前期に限定されるものであった。

土器の溜まり 本来は土師器壺が 7 個体以上も整然と並べられていたが、この土器群が伴っていた遺構は、南区で検出したような平地住居の可能性を考えている。

井戸状遺構 当調査区からは 6 基の井戸状遺構を検出したが、古墳時代前期の井戸状遺構 3 にみられた集水升状の施設を除いて、井戸枠などの内部施設を伴わない素掘りの井戸ばかりであった。この傾向は過去の青木遺跡・馬場第 1 遺跡の調査、新堀地区の調査区内でも共通して指摘できる。

井戸状遺構 5・6 は遺物が出土しなかったので時期の決定はできないが、覆土が中世の遺構のものとも異なり、近世以降の新しい時期のものと考えている。

南区遺構群の時期 南区下層の遺構群の時期は、平地住居内から出土した壺型土器と溝 6 内から出土した土師器片から古墳時代前期の中でも古い時期と考えられる。中層の遺構群は時期の決定を行う資料がないので明確にはできないが、古墳時代のなかであることには間違いない。上層は土坑 15 の灰釉陶器、溝 5・7 などから出土する山茶碗片からみて平安時代後期～鎌倉時代と考えられる。

ここには南北の低湿地に挟まれた僅か数十メートル幅の高まりに各時期の遺構が集中し、それも数百年の時間を隔てて居住域が営まれていた。

2. 遺物のまとめ

遺構別に遺物の時期をまとめる。まず古墳時代前期の土師器を伴うもの。

土坑 2 球形胴化した壺型土器、小型壺、口縁がやや外に開く S 字甕の組み合わせなどから松井氏の研究の第Ⅱ段階（以下、松井氏の第○段階という）に相当すると考えられる（註 1）。

土器の溜まり ここから出土した壺型土器は、過去に青木遺跡で報告された土器の中にない系譜である（註 2）。球形胴化した形態で口縁が先細りしながら、くの字状に真っ直ぐ開く。これらの土器は松井氏の第Ⅲ段階に相当すると考えられる。

井戸状遺構3 ここから出土した壺型土器は下膨れの形態をしているが球形胴化がみられ、松井氏の第Ⅰ段階に相当すると考えられる。

平地住居 ここから出土した壺型土器は胴部と頸部、頸部と口縁部の境で屈曲する（註3）。松井氏の第Ⅰ段階に相当すると考えられる。

次に平安～鎌倉時代の陶器を伴うもの。明確な年代観をまだ持っていないので、ここでは何々時代前期、後期という漠然とした表現を用いた。

井戸状遺構1 碗は大型で浅く口径が広いという特徴がある。高台付きの小皿と共に平安時代末～鎌倉時代前期。第13図－1・8の2点は鎌倉時代後期と考えられる。

土坑3 出土した小皿は高台が付かない。鎌倉時代後期と考えられる。

井戸状遺構3 土坑3で出土した小皿に類似する小皿が出土。鎌倉時代後期と考えられる。

土坑15 ここから出土した2点の灰釉陶器は清ヶ谷白山窯の時期、平安時代後期と考えられる。

3. 遺跡全体でのまとめ

今回の調査は、距離約320mと長いがトレンチの幅が狭く、青木遺跡について語るには余りにも不十分であった。しかし、遺跡の広がりや年代幅については成果を収めた。

遺跡の範囲は従来は県道をその東端と考えていたが、今回の調査で遺構が更に東へと広がっていく傾向がみられたために、その範囲を拡大する必要性が生じてきた。少なくとも数十mは東に広がると考えられる。南北に関しては従来どうり変更はない。

遺物、遺構の時期は古墳時代前期～鎌倉時代後期まで継続してみられる。しかし、その中心は古墳時代前期と平安時代後期～鎌倉時代後期の2時期である。遺物の量からみると圧倒的に古墳時代前期のものが多。鎌倉時代後期以降は急速に衰退し、集落の移動が行われたようにも考えられる。

遺跡の中心、つまり遺構の集中する部分は、調査範囲内では中央区と南区の北端である。

こうして報告書をまとめる間に新堀地区では広大な面積の調査が進行し、常にその成果を意識しながら青木遺跡を考えてきた。隣接する周辺遺跡との関わりに関しては今後の調査研究を待ちたい。

註

1. 松井一明ほか 一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査報告書『坂尻遺跡』一序文・古墳時代編－ 建設省中部地方建設局・静岡県教育委員会・袋井市教育委員会 1985
2. 柴田 稔 『青木遺跡、馬場第1遺跡、西立遺跡』 浅羽町教育委員会 1982
柴田 稔 『青木、馬場第1・第2遺跡』 浅羽町教育委員会 1984
3. 鈴木敏則ほか 『三沢西原遺跡』 菊川町教育委員会 1985 （壺K A類1に類似）

本書をまとめるにあたり、柴田稔氏には原稿の執筆から細かなことまで様々な面でご指導を頂いたが、筆者の力不足から十分に生かしきれなかった。新堀の調査現場では佐野五十三氏、竹山喜章氏から何度も現地の説明を頂いた。特に佐野氏には陶器類についてご教示を頂いた。また、作業員の方々には長雨の中、現地作業に従事して頂いた。文末ではあるが記して感謝の意を表したい。

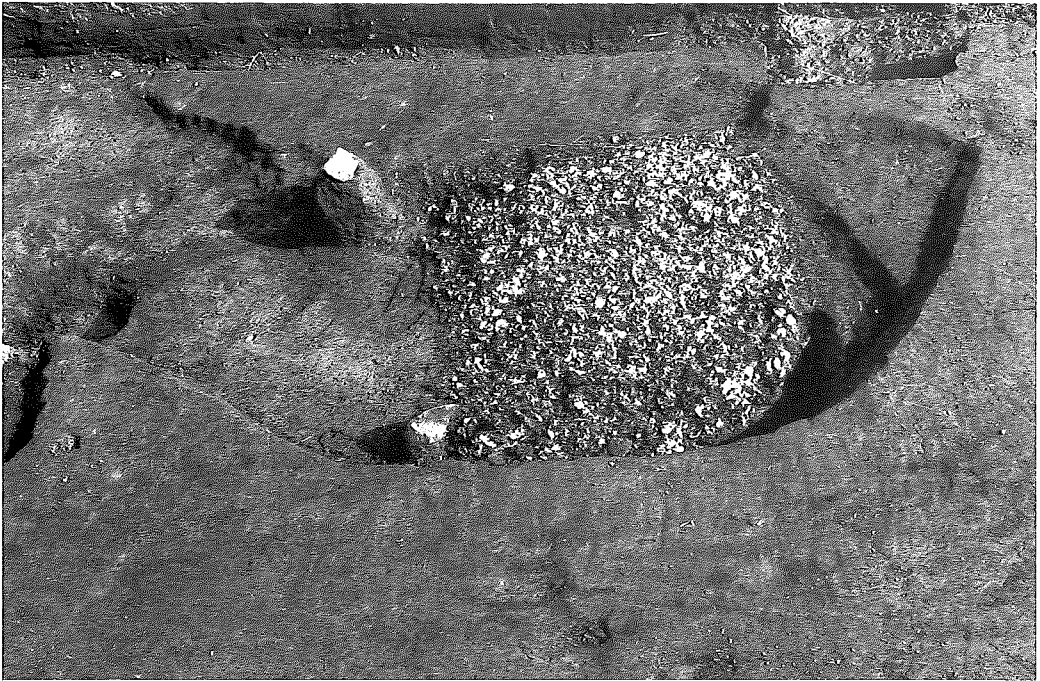
写真図版



掘立柱建物2周辺状況（北から）.



掘立柱建物3検出状況（北から）



土坑 3 貝殻出土状況



土坑 3 完掘状況



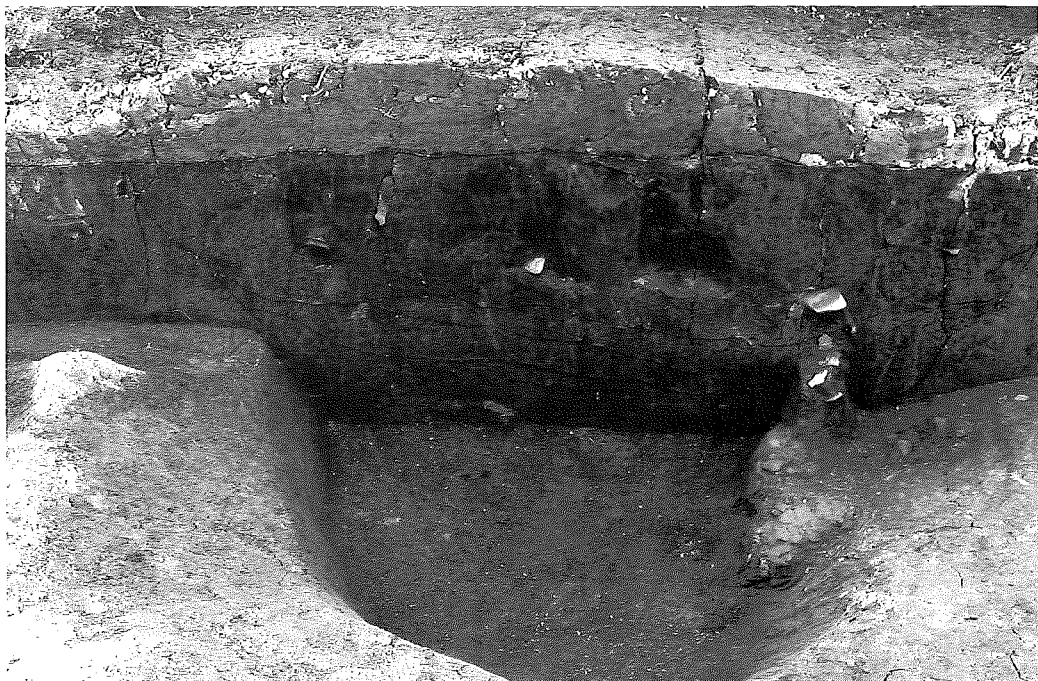
土坑 2 遺物出土状況



土坑 2 遺物出土状況（部分）



土坑 2 土層断面



土坑 4 検出状況



井戸状遺構 3 底部状況



土器の溜まり遺物出土状況



溝2完掘状況（北から）



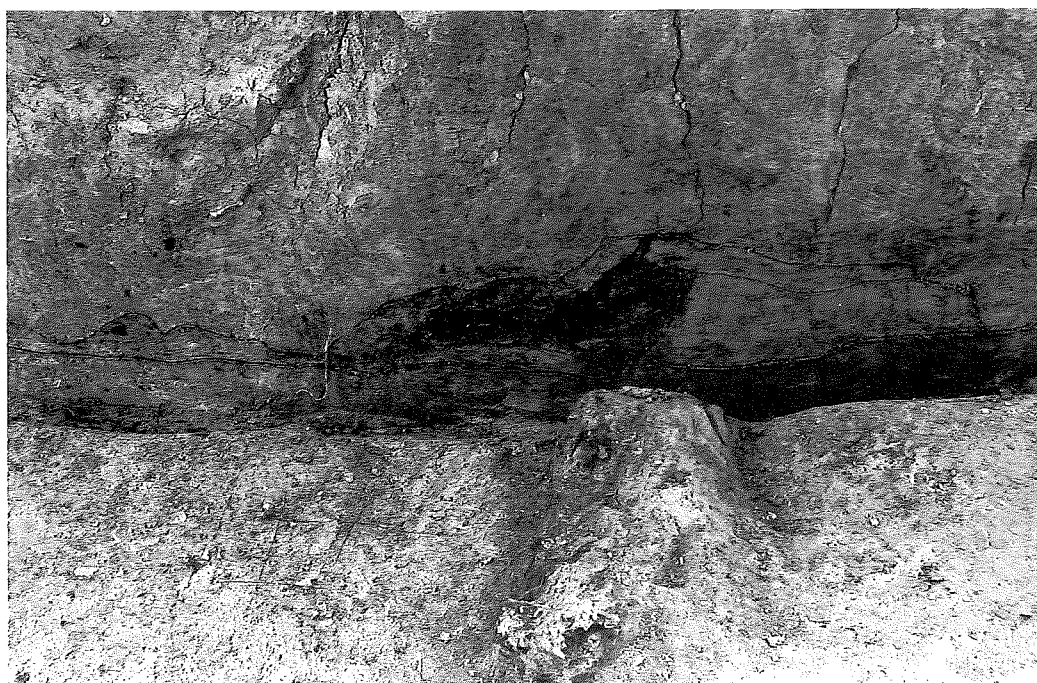
溝2土層断面（西壁）



平地住居炭・炭化材検出状況（北から）



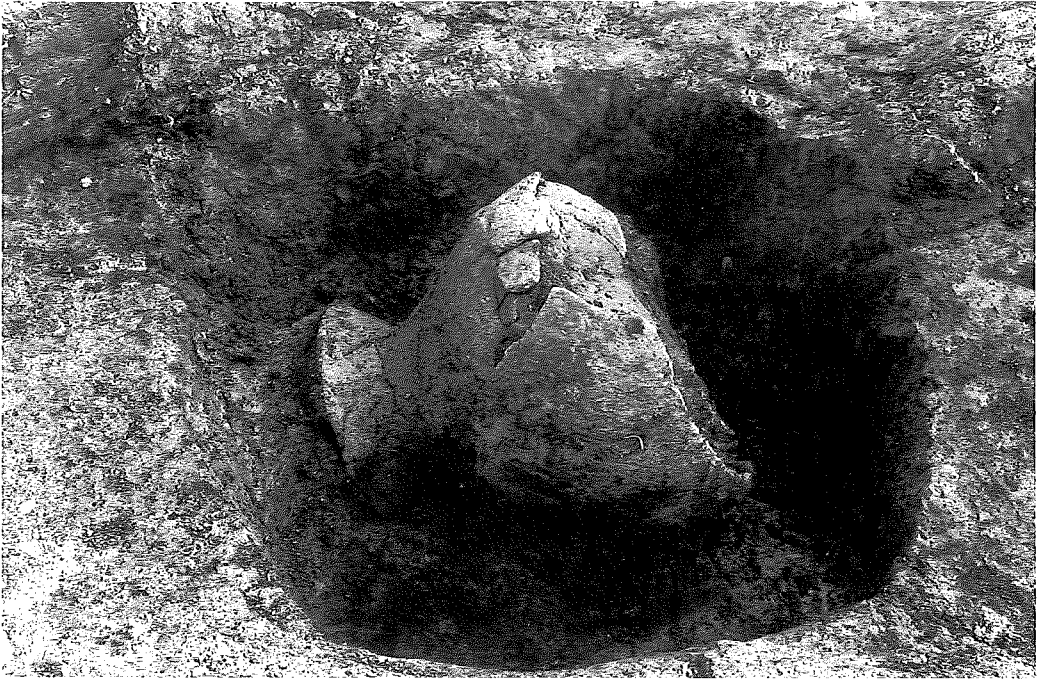
平地住居完掘状況（北から）



平地住居周堤部土層断面（右寄りの台形部分が周堤）



平地住居周堤部状況（上端の線までが周堤の範囲、その先は未掘）



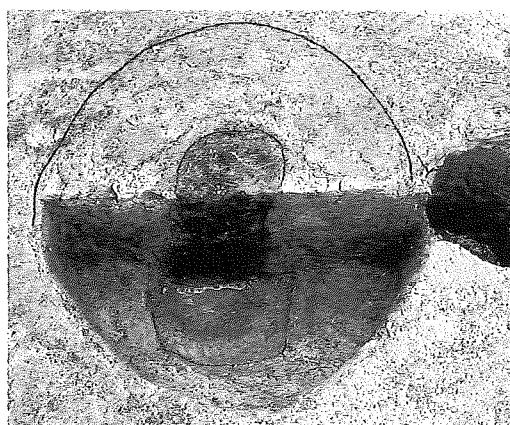
平地住居貯蔵穴内の壺型土器出土状況



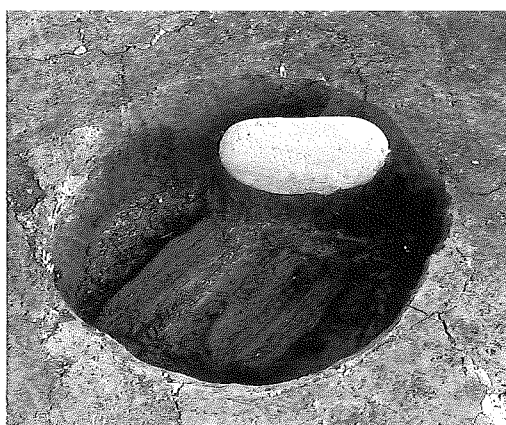
土坑12土層断面



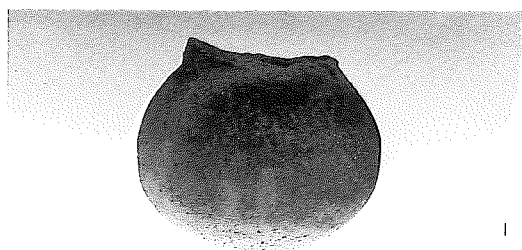
土坑15遺物出土状況



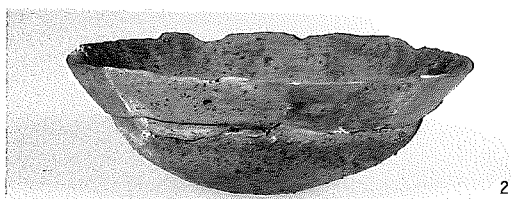
柱穴No. 1 断面



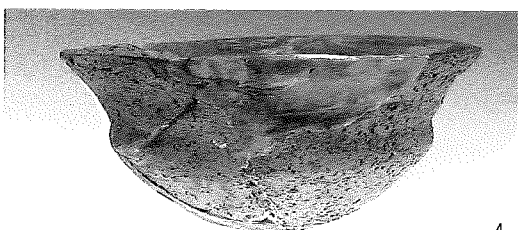
柱穴No. 4 検出状況



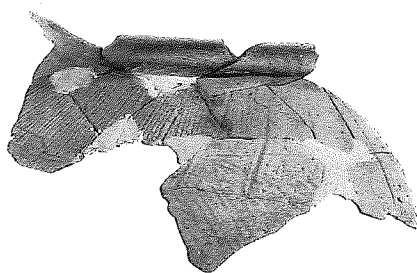
1



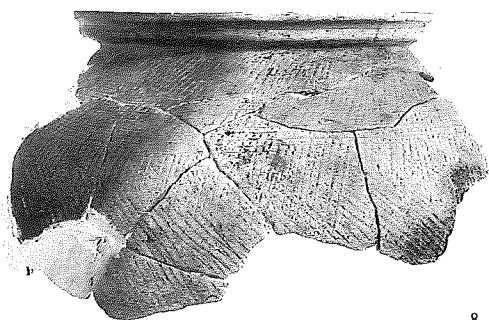
2



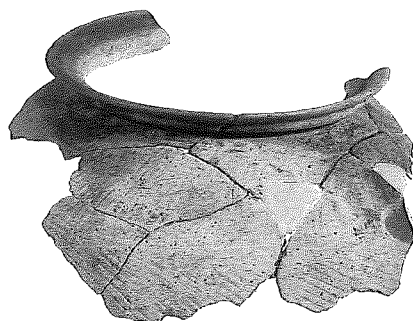
4



7



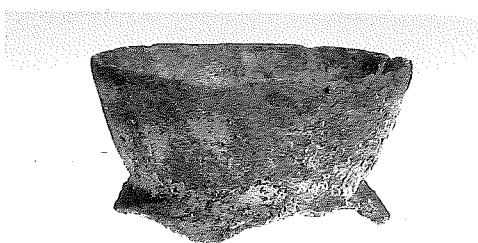
8



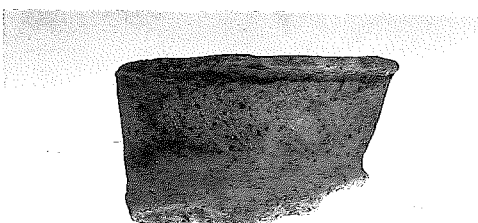
6



5

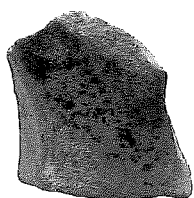


10



11

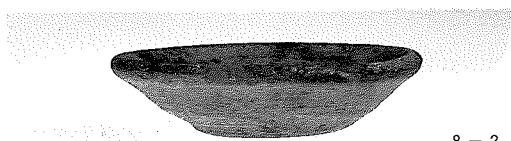
土坑 2 出土遺物



8-1

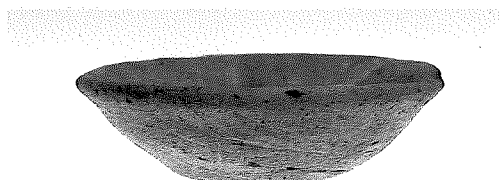


8-3

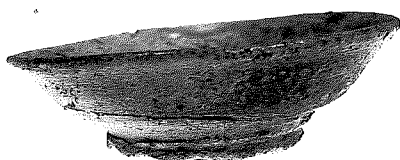


8-2

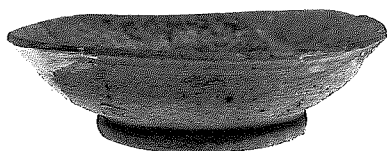
土坑 3 出土遺物



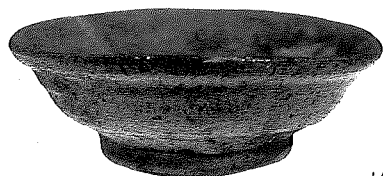
14-1



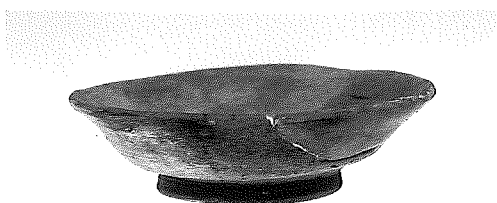
14-2



14-3



14-4



14-5



14-8

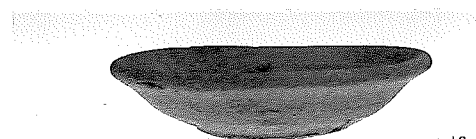


14-9



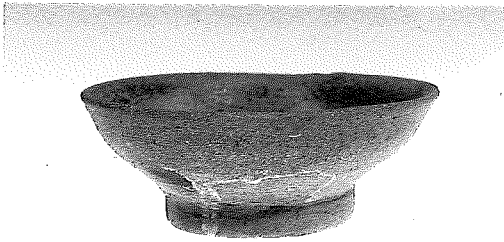
14-10

井戸状遺構 1 出土遺物



18-2

井戸状遺構 4 出土遺物



31-1



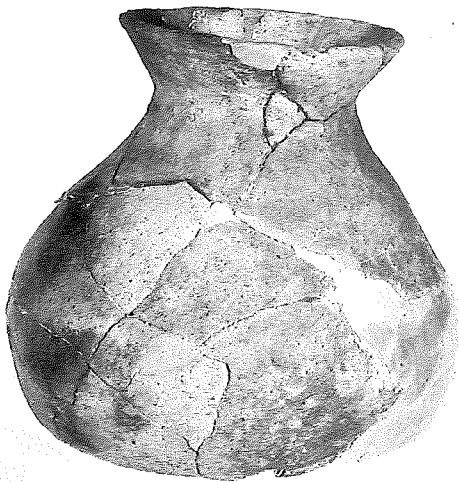
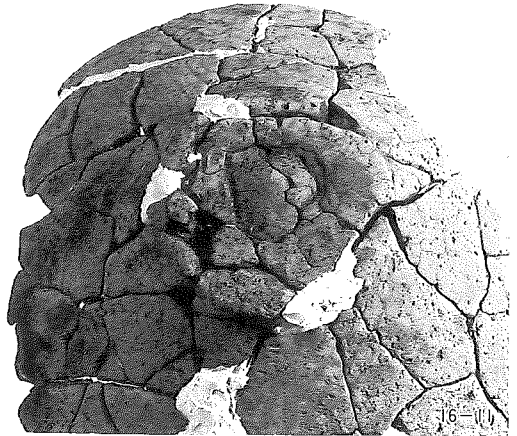
31-2

土坑15出土遺物

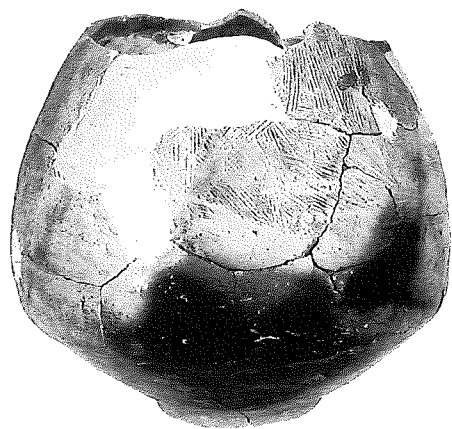


16-10

土器の溜まり出土遺物



平地住居出土遺物



井戸状遺構 3 出土遺物

平成元年度県道西岡笠浅羽線新堀梅山地区
歩道設置工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

青 木 遺 跡

平成3年3月1日

発 行 静岡県磐田郡浅羽町教育委員会
〒437-11 磐田郡浅羽町浅名1022

印 刷 (有)デザインオフィス エム・エス・シー
〒437 袋井市久能1977-7